

7 『彗星はいつも一人』 成井豊

○ジャンル／ファンタジー

○ストーリー／クリスマススイブ。山口県下関市に住む「しずえ」は、小学校からの友人「ヒカリ」の祖母「ナオ」の家に行く。そして、「ヒカリ」から届いた手紙を読んで聞かせる。「ヒカリ」は東京で高校教師をしていた。毎年クリスマスが近づくと、アパートの「ヒカリ」の部屋の前に、チョコレートケーキが置かれる。それが誰の仕業か、やっとなわかつたらしい。幫北条雷太という人だった。その名前を聞いて、「ナオ」が驚く。ナオが58年前に会った人と同じ名前だった……。

○注／この作品は、『レインディア・エクスプレス』を新たに書き直したものです。

○出演者／男7＋女6 計13

○上演時間／120分

登場人物

北条雷太

朝倉ヒカリ（高校教師）

朝倉ナオ（ヒカリの祖母）

酒井しずえ（ヒカリの友人・市役所勤務）

丹羽和生（ヒカリの同僚）

鳥居洋子（ヒカリの上司・教頭）

佐々木岳彦（新聞記者）

村越恭子（佐々木の前妻・ケーキ屋勤務）

村越大地（佐々木の息子・高校2年）

井沢董（大地の後輩・高校1年）

柳生宗太郎（大地の先輩・高校3年）
遠山陣八（雷太の友人）
大岡騎一郎（雷太の友人）

丹羽がやってくる。ノートを持っている。

丹羽

これから僕が読むのは、一人の男の記録です。記録と言っても、この中身がすべて事実であるという確証はありません。が、僕は日本全国の様々な場所へ行き、彼の一三四年に渡る足跡を調査してきました。彼と会った人に話を聞き、彼について書かれた文章を読みました。そうして手に入れた資料に基づいて、彼の人生を再構築してみました。この記録なのです。信じる信じないは、あなたの自由です。が、僕はもちろん信じている。なぜなら、僕は彼に実際に会ったのだから。いや、自分の意見を押しつけるのは止めておきましょう。前置きはこれぐらいにして、早速読み始めたいと思います。(とノートの表紙を見て)『彗星の記録』。(とノートの表紙をめぐって)明治元年十一月、榎本武揚の率いる幕府軍は、箱館五稜郭に新政権を樹立。政府に対して、北海道を徳川家の領地として認めるよう、嘆願書を提出した。が、政府はこれを拒絶し、翌年五月、箱館を占領。榎本政権は五稜郭に籠城したが、敗北は誰の目にも明らかだった。全滅か、降伏か。最後の選択を迫られた榎本は、ついに降伏を決意。明日はいよいよ五稜郭を明け渡す。という前夜、五稜郭の水門から、一隻の小舟が堀へ出た。

雷太・陣八・騎一郎がやってくる。小舟に乗り込む。陣八が櫂を漕ぐ。

陣八
しまった。

騎一郎
馬鹿者。大きな声を出すな。

陣八
すまんすまん。しかし、今、大変なことに気がついたんだ。実は、銭を持

陣八
つてくるのを忘れた。

騎一郎
しまった。俺も忘れた。

陣八
北条殿は？

雷太
俺も持ってこなかった。しかし、おぬしらのように、忘れたわけではない

陣八
ぞ。わざと持ってこなかったんだ。

陣八
なぜです。

雷太
銭を落とせば、チャリンと音がする。川の真ん中から、そんな音が聞こえ

陣八
てみる。敵が怪しむではないか。

陣八
しかし、いざという時、銭がないと困るでしょう。

雷太
飯のことなら、心配するな。海へ出れば、魚がいっぱいいる。

陣八
いや、俺が言いたいのは、飯のことではなくて――

雷太
宿なら、この舟がある。枕がほしければ、俺が腕枕をしてやる。

陣八
そうではなくて、俺が言いたいのは、敵に見つかった時の話です。銭を渡

雷太
せば、目をつぶって通してくれるかもしれない。

雷太
その必要はない。敵に見つかつたら、戦うだけのこと。

騎一郎
北条殿の言う通りだ。武士は武士らしく、堂々と戦って死ぬべきだ。土方

騎一郎
さんのように。

陣八
騎一郎

陣八

騎一郎

雷太

騎一郎

雷太

陣八

雷太

陣八

まさか、あの人が死ぬとはな。
多勢に無勢だ。いくら土方さんでも、勝ち目はなかったんだ。そんなことは、土方さんにもわかっていたはずなのに。
敵の真ん中へ、一人で斬り込んでいったそうだな。まるで、「さあ、殺せ」と言わんばかりに。
俺もあの時、一緒に死ねばよかった。そうすれば、こんな惨めな思いをせずに済んだのに。
惨めとは？
こうして夜中にこそ逃げ出すことです。
逃げるのではない。出直すのだ。また新たに戦うために。
たったの三人で？
俺が榎本さんについてきたのは、降伏するためではない。戦うためだ。榎本さんが降伏すると言うなら、勝手にすればいい。俺はあくまで戦う。たとえ最後の一人になろうとも。
俺も戦います。戦って、死にます。
(陣八に)おぬしは？
とりあえず、漕ぎましよう。早いとこ、海へ出ないと。
三人を乗せた小舟は、五稜郭の堀から海に出た。このまま一気に津軽海峡を渡り、十里先の下北半島大間崎へ行こう。それが、三人の立てた計画だった。が、いくら漕いでも、対岸の灯は見えない。周囲は黒い闇ばかり。やがて、風が出、雨が降り出した。それでも灯は見えない。風雨はどんどん激しくなる。体もどんどん冷えてくる。そのうち、海まで荒れ出した。

三人が揺れて、転がる。慌てて、舟端をつかむ。

陣八
騎一郎

(騎一郎に) おい、この波は何だ？ まさか、嵐でも来たのか？
馬鹿者。五月に嵐が来てたまるか。

陣八
雷太

しかし、この波はただごとではないぞ。
よし、引き返そう。

丹羽
陣八

しかし、五稜郭の灯はどんどん遠くなる。
(雷太に) 駄目です。いくら漕いでも、元に引き戻される。

雷太
騎一郎

どうやら、潮に乗ってしまったようだな。
ということとは？

丹羽
雷太

もはや、俺たちの手ではどうしようもないということだ。
津軽海峡を流れる潮は、西から東へと向かう。三人を乗せた小舟は、太平
洋へと流されつつあった。

陣八
騎一郎

(雷太に) このまま行ったら、どうなるんです？
運がよければ、メリケンに着くだろう。

陣八
騎一郎

じゃ、運が悪ければ？
どこにも着かない。

陣八
騎一郎

海の上をぐるぐる回って、ゆっくり干乾しになるのか？
二人とも安心しろ。この舟は、海峡を出たところで、親潮にぶつかる。す
ると、南へ進路を変えるはずだ。陸から離れることはない。

雷太
騎一郎

よかった。
親潮は岩手の沖で黒潮とぶつかる。舟はそのあたりで止まるだろう。そこ
まで浮かんでいければの話だが。

雷太
騎一郎

よかったです。
親潮は岩手の沖で黒潮とぶつかる。舟はそのあたりで止まるだろう。そこ
まで浮かんでいければの話だが。

騎一 雷太 陣八 丹羽 騎一 陣八 騎一 陣八 雷太 陣八 騎一 陣八 雷太 陣八 騎一 陣八 雷太 陣八 騎一 陣八 雷太 陣八 騎一 陣八

は？

この舟は川舟だ。海の荒波に叩かれて、いつまで壊れずにいるか。

冗談じゃない。何が何でも、引き返しましょう。

（前方を指さして）おい、あれは何だ？

大きな柱が立ってるな。火の見櫓かな。

馬鹿者。海の真ん中に、なぜ火の見櫓があるんだ。

じゃ、一体何だつて言うんだ。

竜巻だ。

竜巻？ 嘘でしょう？

しかし、嘘ではなかった。

（雷太に）この舟、竜巻に向かって流れてますよ。

流れてるんじゃない。引き寄せられてるんだ。

漕げ！ 漕いで、竜巻から逃げるんだ！

しかし、漕いでも無駄だった。

（雷太に）駄目です。どんどん竜巻に近づいていく。

こうなったら、泳いで逃げましょう。

おぬし、泳げるのか？

おぬし、泳げないのか？

北条殿。

陣八、おぬしは騎一郎を見捨てていくつもりか？

見損なわないでください。こうなったら、死ぬも生きるも一緒です。

よし、それでこそ武士だ。

丹羽
騎一郎

実は、三人とも泳げなかった。
こんなことなら、逃げ出すのではなかった。海で溺れ死ぬくらいなら、五稜郭で切腹すればよかった。

陣八
雷太

今さら文句を言うな。まだ死ぬって決まったわけではない。
よし、今生の約束だ。死ぬも一緒、生きるも一緒。ここを生き延びたら、再びともに生き、ともに死のう。

陣八
騎一郎

まあ、ここで死んじまったら、それでおしまいですけどね。
来たぞ来たぞ。

陣八
雷太

北条殿！
二人とも俺につかまれ。死んでも放すなよ。

陣八と騎一郎が雷太の腕をつかむ。そこへ、ヒカリ・ナオ・しずえ・鳥居教頭・佐々木・恭子・大地・董・柳生先輩がやってくる。

丹羽

竜巻は一瞬にして舟を飲み込んだ。舟と一緒に三人を飲み込んだ。三人の体と、三人の心と、三人の思い出と、三人の夢と、三人の生と、三人の死を飲み込んだ。

十人

それから一三四年後、私たちは三人に出会った。竜巻に飲み込まれた時のまま、あの時のままの三人に。私たちは確かに出会った。確かに出会った。

雷太・陣八・騎一郎が去る。ヒカリ・ナオ・しずえ・鳥居教頭・佐々木・恭子・大地・董・柳生先輩も去る。

しずえがやってくる。リュックサックを背負い、袋を持っている。

しずえ おばあちゃん！ おばあちゃん！

反対側から、ナオがやってくる。

ナオ なんね、またあんたかね。

しずえ 悪かったわね、私で。ちよつと、この荷物、どこに置けばいい？
ナオ どこでも好きな所に置けばええじゃろう。一体全体、何の騒ぎかね、今日

は。

しずえ もう、また忘れちゃったの？ 先週、約束したじゃない、パーティーをやるうって。

ナオ パーティー？

しずえ クリスマス・パーティーよ。今日は十二月二十四日なのよ。

ナオ ほう言やあ、そんなこと言うちよつたね。

しずえ (袋を示して) これ、今夜の食事の材料。私、料理はあんまり得意じゃないけど、今から作れば何とかかなと思う。もちろん、おばあちゃんにも手伝ってもらうからね。

ナオ
しずえ

ナオ
しずえ

ナオ
しずえ

しずえ

ナオ
しずえ

ナオ
しずえ

ナオ
しずえ

手伝ってもええけど、ウチは和食しか作れんよ。
(リュックサックの中から本を出して) そう思っ
て、料理の本も買ってきた。今日はローストチ
キンに挑戦よ。ローストチキンていうのはね、
鶏をまるごと一匹、オーブンで焼くの。

オーブン？

そうよ。この家にはオーブンがないのよ。ど
うして最初に気がつかないのよ。しずえのバカ。

そんなことより、連れはどうしたん？

連れてって？

二人だけじゃと盛り上がりかねえ、誰か友
達を連れてくるって言うちよつたじゃろう。あ、
ほうか。後から遅れてくるんじゃね？

それが、誰も来ないんだ。市役所の同僚とか、
高校の時の同級生とか、いろいろ誘ったのよ。
でも、みんな先約があるって。

フオーリーブスみたいなの、連れてくるって
言うちよつたのに。そういう若くてカッコいい
のは、とっくの昔に売り切れだったの。

せっかくのクリスマスじゃけえね。ババアと
パーティーなんて、真っ平ご免なんじゃろう。

そんなこと、誰も言っ
てないよ。

言わんでもわかるっちゃ。ババアは敏感
じゃけえ。へえ、おばあちゃん、結構期待
してんだ。

別に。

隠してもダメよ。やっぱり、一人暮らしは
淋しいもんね。いっそのこと、息子さんと
一緒に暮らしたら？ 息子さんも、「来い」
って言ってくれて

ナオ
しずえ

ナオ
しずえ

ナオ
しずえ

しずえ

ナオ
しずえ

ナオ
しずえ

しずえ

ナオ

るんでしよう？

ウチはこの家がいい。

でも、そのうち、足腰も弱くなるだろうし。息子さんの家に行けば、炊事も洗濯もみんなやってもらえるんだよ。

ほいじゃけど、息子の家からは海が見えん。

そうか。旦那さんは海で亡くなったんだもんね。だからって、このままずっと一人だなんて、淋しすぎるよ。

そういうあんたはどうなんね。

私？

二十五にもなつて、男がおらんのにじゃろう？ 普段はともかく、クリスマスに女一人は淋しすぎる。

あら、クリスマスは彼氏と過ごさなくちゃいけないなんて、一体誰が決めたの？ 私は別にクリスマスチャンじゃないけど、クリスマスってもっと神聖なものだと思ふのよね。

イエスさんが生まれた日じゃろう？

そうよ。そして、サンタさんがプレゼントをくれる日。

そりゃ、子供だけの話っちゃ。ババアの所へは来てくれん。

だから、私が来たんじゃない。

え？

おばあちゃんにはいつもお世話になつてるでしょう？ お茶をご馳走になつたり、ただでお魚をもらつたり。だから、今日は感謝の印に、私の手料理をプレゼントしようと思つたの。

あんた、ええ人なんじゃね、見た目より。

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

見た目よりは余計よ。

ほいじゃけど、所詮は赤の他人じゃろう？　なんでこんなことまで。

ヒカリが東京へ行く時、約束したのよ。おばあちゃんの面倒は私が見るつて。でも、何度も遊びに来るうちに、友達みたいになっちゃったから。

はあ、六年になるんじゃないか。ヒカリが東京へ行ってから。

七年よ。高校を卒業して、すぐだから。そう言えば、これ。(とポケット

から封筒を取り出して)ヒカリから手紙が来たの。

ウチには来ちよらん。

拗ねることないじゃない。ほらほら、おばあちゃんにも読ませてあげるか

ら。(と封筒を差し出す)

(受け取って)ええんかね？

なんか、おかしなことが書いてあるのよ。だから、おばあちゃんの意見が

聞きたいんだ。私、ワインを買ってくるから、その間に読んで。

(封筒から便箋を取り出して)細かい字じゃね。こんなな蟻ん子のような

字、ババアには読めん。読んで。(と便箋を差し出す)

仕方ないなあ。じゃ、ワインは後にするか。(と便箋を受け取って読む)

「前略、酒井しずえ様。今年のクリスマスも相変わらず、デートの予定は

なしですか？」

そう言う自分はどうなんね。

「そう言う私も、予定はなし。今年も一人でチョコレートケーキを食べよ

うと思っっています。そうそう。そのケーキのことなんだけど、しずえには

前に話したよね？」

ケーキ？

しずえ

おばあちゃんは何聞いてないの？ ヒカリが東京へ行ってから、毎年、クリスマスが近くなると、ケーキが届くのよ。それが、ケーキ屋さんとか、宅配便の人が持ってくるんじゃないの。アパートの扉の前に、誰かが黙って置いていくのよ。

犯人は笠地蔵じゃね。

ナオ
しずえ

悪いけど、少し静かにしてて。「実は、そのケーキを届けてくれる人がわかったの。」と言つても、まだ確証はないんだけど。事の起こりは、一週間前の昼休み。職員室で、丹羽先生と話をしていた時」

別の場所に、ヒカリがやってくる。後を追つて、丹羽がやってくる。二人とも、教科書やノートやフイルを持っている。

丹羽

朝倉先生、今日のお昼ごはんは何ですか？

ヒカリ

セブンイレブンのカルビ焼肉弁当です。

丹羽

またコンビニですか？ たまには早起きして、自分でお弁当を作ろうって

ヒカリ

気にはならないのかな。

丹羽

そういう丹羽先生はどうなんですか？

ヒカリ

僕はもちろん、早起きしましたよ。今朝はロールキャベツに挑戦しました。良かったら、味見させてあげましょうか？

丹羽

結構です。お弁当に凝るのもいいけど、期末の採点は終わつたんですか？

ヒカリ

いいえ、まだ途中です。

丹羽

もし良かったら、うちのクラスだけ、先に採点してもらえませんか？

ヒカリ

どうしてですか？

丹羽

ヒカリ

丹羽

ヒカリ

丹羽

ヒカリ

丹羽

ヒカリ

丹羽

ヒカリ

丹羽

そこへ、鳥居教頭・佐々木がやってくる。

鳥居教頭

ヒカリ

鳥居教頭

佐々木

鳥居教頭

佐々木

村越君の点数が知りたいんです。他の教科が軒並み落ちてるんで。数学な
んか、たったの三点だったんですよ。

もちろん、百点満点で、ですよね？

期末で三点満点のテストをやる教師はいません。

確かに、あいつは理系が苦手だけど、三点ていうのは前代未聞だな。

だから、私、心配で。何か悩み事もあるのかしら。

違いますよ、朝倉先生。あいつの成績が落ちたのは、もっと別な理由です。

別な理由って？

恋ですよ。あいつ、最近、一年C組の井沢董と仲がいいでしょう。よく二

人で帰ってるみたいだし。

全然知りませんでした。

アフターファイブに何をしようと、朝倉先生の自由ですよ。でも、自分の

クラスの生徒ぐらい、しっかり見てほしいなあ。

朝倉先生、ちよつといいですか？

何か？

佐々木さん、こちらが先程、お話しした、朝倉ヒカリ先生です。二年A組

の担任で、教科は国語、校務分掌は進路。

(ヒカリに)初めまして、佐々木です。

朝倉先生、こちらは――

ちよつと待ってください。(ヒカリに)僕は一体どんな仕事をしていると

ヒカリ

丹羽

佐々木

丹羽

佐々木

丹羽

佐々木

ヒカリ

佐々木

ヒカリ

鳥居教頭

ヒカリ

鳥居教頭

ヒカリ

丹羽

ヒカリ

佐々木

鳥居教頭

佐々木

鳥居教頭

思いますか？ 当ててください。
いきなり、そんなこと言われても。

刑事。

まさか。

名探偵。

それは仕事じゃない。

ただの探偵。

探偵にこだわりますね。まあ、何かを調べるっていう点では近いかもしれない。答えは記者です。（とヒカリに名刺を差し出す）

（受け取って読む）「読振新聞社会部、佐々木岳彦」

これで、僕の顔と名前は覚えたでしょう？ 無礼なヤツだと思ったかもしれませんが、今のは取材対象と仲良くなるためのテクニクなんです。あしからず。

あの、新聞社の方が私に何か？

佐々木さんは今、現代の教師をテーマにした、特集記事を書いているんだそうです。で、うちの学校に、誰かおもしろい先生はいないかって言われたので。

朝倉先生を紹介したってわけですか？

そんな。（佐々木に）私、別に、おろしろくなんかありません。どこにでも

いる、若さだけが取り柄の、普通の教師です。

おかしいな。教頭先生は、そうは言ってませんでしたよ。

（ヒカリに）確かに、教師としてはただの新米です。しかし、女優としてはすでに数々の舞台を踏んでいるベテランだとか。

ヒカリ
鳥居教頭

ヒカリ
丹羽

教頭先生、ご存知だったんですか？
ええ。私は学校中にスパイ網を張りめぐらせていますから。
まさか。（と丹羽を見る）
別に告げ口したわけじゃない。教頭先生に聞かれたんだ。朝倉先生は毎日、
五時に帰る。そのくせ、男の匂いが全くしない。一体何をやってるんだつ
て。

佐々木

鳥居教頭

（ヒカリに）趣味で演劇をやってる先生って、意外と多いんですよ。それ
だけじゃ、ニュース・バリューはないんですが。

朝倉先生の場合は趣味じゃない。（ヒカリに）なぜなら、あなたは毎日、
劇団に行っている。正直に言いなさい。あなたの本業は教師ですか。それ
とも、女優ですか。

ヒカリ

鳥居教頭
丹羽

正直に言っても、怒りませんか？

その質問がすでに答えになっています。

（ヒカリに）こういう時は、「もちろん、教師です」って言うんですよ。
それが社会人としての礼儀でしょう。

でも、私にとっては、どっちも大切なんです。

教頭先生もそう言っていましたよ。朝倉先生は、教師の仕事も一生懸命やつ
ているって。それで、僕も興味を持つたんです。

（ヒカリに）校長先生の許可は取ってあります。後は、あなたの気持ち次第
ですよ。

ヒカリ

佐々木
丹羽

（佐々木に）でも、私なんかの記事になりますか？

それは取材してから判断します。

（ヒカリに）記事になれば、劇団の宣伝になるんじゃないですか？

佐々木
ちなみに、うちの新聞は、日本全国で八百万の人に読まれています。

ヒカリ
わかりました。お引き受けします。

鳥居教頭
そう言うだろうと思つてました。(佐々木に) じゃ、後はあなたにお任せ

佐々木
します。存分に取材してください。

まず、朝倉先生の教え子に会つてみたいな。二年A組の子たちに、会わ

せてくれませんか。

ヒカリ
じゃ、教室にご案内します。

ヒカリ・佐々木が去る。

丹羽
教頭先生は反対じゃないんですか？ 朝倉先生が演劇をやつてること。

鳥居教頭
もちろん、反対ですよ。二足の草鞋が通用するほど、教師は甘くありません。

丹羽
じゃ、どうして。

鳥居教頭
今、何を言つても、聞くわけじゃないですからね。まあ、若いうちはやりたい

丹羽
ことをやればいいんです。

鳥居教頭
若いうち、だけですか。

丹羽
せいぜい三十までですね。それまでに、あの人も諦めるでしょう。大体、

あの顔で女優だなんて、おこがましいですよ。女優っていうのは、かわい

くてかわいくて困っちゃう、そういう人がやるべきです。

丹羽
教頭先生だけは敵に回したくないですね。僕、一生ついていきますから。

丹羽・鳥居教頭が去る。

ナオ
しずえ
ケーキの話はどうなったん？ ちつとも出てこんけど。
もうすぐ出てくるから、大丈夫。それより、凄いと思わない？ ヒカリの
ことが天下の読振新聞に載るのよ。

ナオ
しずえ
まだ載ると決まったわけじゃないじやろう。

ナオ
しずえ
それはそうだけど、取材を受けるだけでも、名誉なことだと思ふなあ。
別に何か偉いことをしたわけでもない。ちよつと変わった先生つちゆうだ
けのことじやろう。

しずえ
もしかして、ヒカリのことを批判するつもりなのかな？ 最近の教師はた
るんでるって。

ナオ
しずえ
ありそうな話じゃね。実際、ウチもそう思うし。

ナオ
しずえ
でも、ヒカリは本気で女優になりたいのよ。私は結構才能があると思う。
ないない。ヒカリが女優になれるなら、ウチじやって――

しずえ
続きを読むね。「そして、私は佐々木さんと一緒に、二年A組の教室に向
かいました。佐々木さんは黙って、校舎の中をジロジロ見えています。それ
はまるで、誰かを探しているかのようにでした」

別の場所に、董がやってくる。後を追って、大地がやってくる。本を持っている。

大地

井沢、ちよつと待てよ。

大地

私に何か？

大地

(本を示して)これ、俺の机の上に置いてったの、おまえだろう？

大地

どうしてそれを？

大地

俺のクラスのヤツが見てたんだよ。一年が二年の教室に入ってきたら、目

大地

立つに決まってるだろう？ ほら、返すよ。(と本を差し出す)

大地

その本は先輩に差し上げます。剣道の参考にしてください。

大地

悪いけど、俺、読書は嫌いなんだ。

大地

でも、それを読めば、きっと強くなれます。

大地

(表紙を見て)『燃えよ剣』か。おまえは俺に、土方歳三になれっていう

大地

のか？

大地

違います。沖田総司です。それは、千回読んでも、不可能だ。やっぱり、返すよ。(と本を差し出す)

大地

そこへ、ヒカリがやってくる。

大地

そこへ、ヒカリがやってくる。

大地

村越君、ウチのクラスの子たち、まだ教室にいる？

大地

ええ。みんな、弁当、食ってますよ。

大地

良かった。実は、みんなに紹介したい人がいてね。(奥に向かって)佐々

大地

木さん、早く来てください。

大地

そこへ、佐々木がやってくる。手には空き缶。

大地

そこへ、佐々木がやってくる。手には空き缶。

佐々木

最近の高校生は、まじめに掃除しないんですね。廊下に、空き缶が転がってましたよ。

ヒカリ

掃除させても、すぐに散らかすんです。ゴミはゴミ箱につて、いつも言うてるのに。そうそう。村越君、こちらは読振新聞の佐々木さん。今日はなんと、私の取材にいらっしやったの。

大地

先生の？

ヒカリ

嘘じゃないのよ。で、まずは私が担任をしてるクラスの子たちに、話が聞きたいって。

佐々木

(大地に)その前に、これをゴミ箱に捨ててきてくれないか。(と空き缶を差し出す)

ヒカリ

あ、それは私が捨ててきます。

佐々木

いや、僕は彼に捨ててきてほしいんです。(大地に)これを捨てたのは君じゃないだろう。でも、ここは君の学校だ。

大地が走り去る。

ヒカリ

村越君！(佐々木に)いきなり、あんなこと言っちゃダメですよ。最近の高校生はすぐにキレるんだから。

佐々木

すいませんでした。彼がどんな反応をするか、見てみたくなっちゃって。それ、私が捨ててきます。(と空き缶に手を伸ばす)

董

(董の手を避けて)いいよ、自分で捨てるから。

佐々木

(空き缶を取って)ここは私の学校です。それから、先輩は別にキレたわけじゃないと思います。きっと驚いたんです。あなたの態度に。

堇が去る。反対側へ、ヒカリ・佐々木が去る。

しずえ

「それから、私は教室に行つて、クラスの子たちに佐々木さんを紹介しました。村越君はそこにはいなかったけど。次に村越君と話をしたのは、学校を出て、駅に向かう途中でした」

別の場所に、ヒカリがやってくる。後を追つて、丹羽がやってくる。

丹羽

ヒカリ

朝倉先生、今日も五時キツカリにお帰りですか？

丹羽

ヒカリ

もしかして、怒つてます？ 僕が告げ口したこと。

丹羽

それじゃ、認めるんですね？ 自分が教頭先生のスパイだって。誤解しないでください。僕は、朝倉先生の演劇活動を応援してるんですよ。この前、行った公演なんか、実にすばらしかった。朝倉先生の演技も絶品

だったし。

ヒカリ

丹羽

よく言うわよ。途中で寝たくせに。気づいてたんですか？

ヒカリ

一番前の席で寝られたら、誰だって気づきますよ。どうせ見るなら、もつと真剣に見てほしいわ。

丹羽

ヒカリ

そういうことを言うと、次の公演のチケット、買ってあげませんよ。ごめんなさい。言いすぎました。

反対側から、大地がやってくる。竹刀の入った袋とスポーツバッグを持っている。

大地

朝倉先生。

丹羽

あれ、今日は一人か？ ガールフレンドは一緒じゃないのか？

大地

俺は朝倉先生に用があるんです。(ヒカリに) 先生は、昼間来た記者がど

ヒカリ

うという人か、知ってますか？
どういう人って言われても。口は悪いけど、なかなかおもしろい人じゃないかな。

ヒカリ

それだけですか？ 先生は何も聞いてないんですね？

大地

村越君、あなた、何が言いたいの？

ヒカリ

先生にお願いがあります。あいつの取材を断ってください。

大地

どうして。

ヒカリ

あいつは嘘つきです。本当は、先生の記事を書くつもりなんかないんだ。

大地

そんなことはないと思うよ。だって、嘘をつく理由がないもの。

ヒカリ

お願いします。断ってください。

大地

やめろよ、大地。こんな所で、大きな声を出すな。(と大地の肩をつかむ) 大

丹羽

(丹羽の手を振り払って) 俺は朝倉先生と話をしてるんです。

地

どうしたのよ、村越君。

ヒカリ

(ヒカリの腕をつかんで) お願いします、朝倉先生！

大地

おい、大地！(と大地の肩をつかむ)

丹羽

大地が丹羽の手を振り払い、突き飛ばす。ヒカリが大地の腕をつかむ。大地がヒカリの

手を振り払う。ヒカリが倒れる。

大地が丹羽の手を振り払い、突き飛ばす。ヒカリが大地の腕をつかむ。大地がヒカリの

丹羽 大地！
大地（ヒカリに）あいつに騙されちゃいけない！ あいつは嘘つきなんだ！

そこへ、雷太が飛び出す。手にはケーキの箱。大地を突き飛ばす。

丹羽 何ですか、あなたは。

雷太（ヒカリに）ここは俺に任せて、逃げるんだ。

ヒカリ 逃げるって、どこへ？

雷太 いいから、黙って俺の言うことを聞くんだ、ヒカリ。

ヒカリ どうして私の名前を知ってるんですか？

雷太 それは秘密だ。

雷太が大地につかみかかる。大地が雷太を殴る。雷太がよろめく。

雷太 なかなかやるな、少年。

雷太が箱を地面に丁寧に置き、大地に殴りかかる。大地が避ける。雷太がさらに大地に殴りかかる。ヒカリが雷太の腕をつかむ。

ヒカリ うちの生徒に何をするんですか。

雷太 逃げろと言ってるのがわからんのか。

ヒカリ あなたこそ、早くどこかへ行ってください。

雷太 聞き分けのないヤツだな。俺はおまえを助けるために――

大地が雷太の肩をつかみ、ヒカリから引き剥がす。雷太が大地に殴りかかる。大地が竹刀の入った袋で、雷太に打ちかかる。雷太が避けて、ケーキの箱を踏む。

雷太 あっ！ 貴様、なんてことを。

大地 踏んだのはあんたじゃないか。

雷太 黙れ！（と大地に殴りかかる）

ヒカリ 丹羽先生、何とかしてください！

丹羽 あー、僕は喧嘩は苦手なのに。

丹羽が雷太の腕をつかむ。大地が雷太に打ちかかる。雷太が倒れる。

大地 いけね。もろに入っちゃった。

ヒカリが雷太を抱き起こす。

ヒカリ まずいわ。前歯が折れてる。

大地 急いで、病院へ運びましょう。

ヒカリ それより、あなたの家へ行こう。お店の車を借りて、病院へ運ぶのよ。

大地 わかりました。

大地が雷太を背負う。丹羽が大地の荷物を持つ。ヒカリが雷太の箱を持つ。

丹羽
ヒカリ

この人、朝倉先生の知り合いなんですか？
いいえ、全く記憶にありません。誰なんだろう、この人。

雷太・ヒカリ・丹羽・大地が去る。

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

誰なのよ、この人。

東京は怖い所じゃね。見ず知らずの男が襲いかかってくるんじゃない。

見ず知らずじゃないよ。ヒカリの名前を知ってたじゃない。

ほう言やあ、ヒカリちゆうとったね。

呼び捨てにするってことは、かなり親しい関係ってことよね？

きつと大学の先輩か何かじゃろう。

違うよ。そんなに最近の知り合いだったら、ヒカリも覚えてるはずだもん。

ちゆうことは、こつちで一緒じゃったちゆうことかいね？

おばあちゃんは知らない？

ウチが知つちよるわけないじゃろう、こんとなおかしな男。

よく考えてよ。

そう言われても、手紙では顔がわからんのじゃけえ。

そう言えばそうね。「村越君の家は駅前にあるケーキ屋さんです。社長は

村越君のおじいちゃん。お母さんは離婚した後、実家に出戻ってきて、今

は副社長。働き者の、とつても元気なオバサンです」

別の場所に、

ヒカリが走ってくる。手にはケーキの箱。

ヒカリ お母さん！ 村越君のお母さん！

反対側から、恭子がやってくる。

恭子 朝倉先生。そんなに慌てちゃって、どうしたんですか？

ヒカリ 実は今、村越君が――

恭子 あら、その箱は？ うちの店の箱じゃないですか。

ヒカリ え？ そうなんですか？

恭子 こんなにペチャンコになっちゃって。ちよつと貸してください。（と箱を奪い取る）

ヒカリ あの、それは、私がやったんじゃない――

恭子 （箱からケーキを出して）あーあ。これじゃ、もう食べられないじゃないの。

ヒカリ それ、チョコレートケーキですよ？

恭子 自慢じゃないけど、うちのおじいちゃんを作る中で、これが一番おいしいんですよ。誰です。誰がおじいちゃんのか、ケーキをこんな目に遭わせたんです。

ヒカリ 話せば長くなるんですが、まず最初に村越君が来て――

恭子 信じられない。犯人はうちの息子ですか？

そこへ、大地が雷太を背負ってやってくる。後から、丹羽もやってくる。手には大地の荷物。

大地

恭子

大地

恭子

丹羽

大地が雷太を床に降ろす。

ただいま。

大地！ 今日の夕食は抜きよ。それから、おじいちゃんの肩叩きを右左五
百回ずつで合計千回。

どうして。

あら、その人は？

(大地に) よし、ここに降ろすんだ。

恭子

ヒカリ

恭子

丹羽

大地

恭子

ヒカリ

恭子

その人、気を失ってるの？ 一体、何があったのよ。
村越君が竹刀で顔を叩いちやっただけです。
この子、暴力事件を起こしたんですか？
大地は悪くないんです。この人がいきなり襲いかかってきたから。
(恭子に) 正当防衛だったんだよ。
偉そうな口、叩くんじゃないの。理由はどうあれ、他人様に怪我をさせた
ことに変わりはないでしょう？
すぐに病院へ運びたいんです。お店の車を貸してもらえませんか？
どうぞどうぞ。あ、ダメだ。さっき、おじいちゃんが乗ってっちゃったん
だ。

そうですか。じゃ、救急車を呼んだ方がいいかな。

救急車？ 歯が折れただけなの？

急いで血を止めないと、面倒なことになるでしょう？ それに、顎の骨ま
で折れてる可能性もあるし。

ヒカリ

丹羽

ヒカリ

恭子

どっちにしても、とりあえず、血を止めないと。(奥に向かつて) 董ちゃん！ 董ちゃん！

そこへ、董がやってくる。

董

何ですか？

恭子

タオルを持ってきて。冷たい水で濡らして。

董

はい、ただいま。

董が走り去る。

丹羽

今のは、一年C組の井沢董じゃないですか？

恭子

そうですね。今月の一日から、アルバイトで雇ったんです。ケーキ屋は、

丹羽

十二月が一番忙しいから。

大地

なるほどね。一分でも長く、大地のそばにいたいわけだ。

丹羽

俺は迷惑です。

雷太

俺は迷惑です。一度言ってみたいなあ、この科白。

恭子

(目を開ける)

ヒカリ

あ、この人、目を覚ましましたよ。

雷太

(雷太に) 大丈夫ですか？

恭子

ここは？

大地

ケーキの村越屋です。クリスマスケーキは、ぜひ当店で。

大地

こんな時に、宣伝なんかするなよ。

雷太

あ、貴様！

雷太が立ち上がり、大地に殴りかかる。ヒカリが雷太の腕をつかむ。

ヒカリ

ちよつと待って。

雷太

放せ、ヒカリ。さっきは不覚を取ったが、今度こそは。

恭子

うちの子に、何をするんですか。

雷太

ほう、俺が寝ている間に、援軍を呼んだのか。よし、二人でも三人でも、

ヒカリ

束になつてかかってこい。

雷太

なぜ止める。こいつはおまえの敵なんだろう？

ヒカリ

違います。この子は私の教え子です。

雷太

教え子？ 教え子がなぜ先生を突き飛ばすんだ。

恭子

(大地に) あんた、先生を突き飛ばしたの？

大地

違うよ。あれは、丹羽先生がつかみかかってきたから。

丹羽

本当ですか、先生？

雷太

確かに、最初に手を出したのは僕です。大地が言うことを聞かないから、

雷太

つい、感情的になっちゃって。

ヒカリ

ということは、別に襲われていたわけではないんだな？ だったら、俺の

大地

出る幕はない。さらばだ。(と歩き出す)

雷太

ちよつと待って。あなた、怪我は大丈夫なんですか？

雷太

(雷太を見て) あれ？ この人、歯が生えてる。

雷太

当たり前だ。

丹羽
大地
雷太

本当だ。さっきは間違はなく、折れてたよな？
俺、見たよ。一度折れた歯がどうしてまた生えてくるんだ？
よかった。これでやっと永久歯がそろった。では。(と歩き出す)

そこへ、董がやってくる。手にはタオル。

董

持ってきました、タオル。

恭子

ありがとうございます、董ちゃん。その人に貸してあげて。

董
雷太

(雷太に) どうぞ。あれ？
何だ。

董

あなた、さっき、うちの店でケーキを買っていった人じゃないですか？
三千円のチョコレートケーキ。

恭子

じゃ、このケーキはあなたのなんですか？(と箱を差し出す)

雷太

ああ、危うく忘れるところだった。(と箱に手を伸ばす)

雷太
恭子

(箱を引っ返して) これじゃ、もう食べられませんよ。かわりに、もう一つ持っていきませんか。お代は結構ですから。
いや、そういうわけには行かない。(と箱をつかむ)

雷太

(箱を引っ張って) でも、これをこんなふうにしたのは、うちの息子なん
でしよう？
そうじゃない。踏んづけたのは俺だ。(と箱を奪い取って) では。

ヒカリ

そのケーキ、どこへ持っていくんですか？

雷太
ヒカリ

決まってるだろう。家に持って帰って、食うんだ。
本当ですか？

雷太
ヒカリ
雷太
ヒカリ
丹羽
ヒカリ
雷太
大地
雷太
ヒカリ
ヒカリ
恭子
大地
雷太
ヒカリ
恭子
ヒカリ
恭子
雷太
ヒカリ

本当だ。俺はケーキには目がないんだ。これぐらい、一口で食べる。
あなた、一体誰なんですか？
誰でもない。ただの通りすがりの者だ。
でも、私の名前を知ってたじゃないですか。私たち、前にどこかで会って
るんですか？
やっぱり、思い出せないんですか？
ええ。でも、絶対に会ってるはずなんです。（雷太に）教えてください。
あなた、一体誰なんですか？
忘れたのか、ヒカリ。俺だよ。土方だよ。
土方？
下関第五小学校で同級生だった、土方だよ。五年生の時、一緒に美化委員
をやったじゃないか。
確かに美化委員はやったけど、あなたのことは覚えてない。
その頃の俺は、地味で目立たない子供だったからな。まあ、久しぶりに話
ができて、楽しかった。では、またな。（と歩き出す）
もう帰っちゃうんですか？ 良かったら、コーヒーを飲んでいってください
いよ。朝倉先生も一緒に。
いいんですか、お母さん？
久しぶりに会ったんだもの、積もる話もあるでしょう？ 董ちゃん、急い
でコーヒー豆、買ってきて。
豆ぐらい、買っておけよ。
（恭子に）気持ちはうれいんですが、これから行く所があるんですよ。
そう言わずに、もう少し話をしてってよ、土方君。

そこへ、騎一郎がやってくる。

騎一郎

北条殿。

ヒカリ

北条殿？

雷太

(騎一郎に)おぬし、どこへ行っていたんだ。

騎一郎

何を言ってるんですか。先に姿を消したのは、北条殿の方でしょうか？

ヒカリ

その人、土方君のお友達？

雷太

いや、こいつは昔からの知り合いです。

騎一郎

いいんですか、話をしちやって。

雷太

良くない。それではヒカリ、また逢おう。

雷太・騎一郎が去る。反対側へ、丹羽・恭子・大地・董も去る。

しずえ

何なのよ、あの人。

ヒカリ

本当におかしな人でしょう？ しずえはあの人のこと、覚えてない？

しずえ

覚えてないよ、土方なんて。

ヒカリ

本当の名前は北条なんじゃないかな。五年生の時、クラスに北条なんて人、

しずえ

いたっけ？

ヒカリ

いなかった。隣のクラスにも、そのまた隣のクラスにもいなかった。

しずえ

そうよね？ でも、私は前にもあの人に会ってる。そうであれば、毎年、

ヒカリ

ケーキを届けてくれるはずなもの。

しずえ

あのケーキは単なる偶然だったとは考えられないの？

ヒカリ
しずえ

でも、あの人は私の名前を知ってたのよ。
そうか。あの人、あんたの小学校時代のことも知ってたよね？　というこ
とは、その頃、下関に住んでたんじゃない？
でも、うちの近所には、北条なんて人、いなかったと思うんだけど。

ヒカリが去る。

しずえ
ナオ

おばあちゃんはどうか？　おばあちゃんは北条って人、知ってる？
知っちゃうる。

しずえ

え？　知ってるの？

ナオ

うちの近所に住んじよった。今から四十八年前。

しずえ

四十八年前？　その人、一体いくつなのよ。

ナオ

ウチより十歳年上じやった。下の名前は雷太。北条雷太。

ナオ・しずえが去る。

丹羽がやってくる。ノートを持っている。

丹羽

(ノートを開いて) 明治二年五月、三人は小舟の上で目を覚ました。小舟はどこかの岬の突端の、岩と岩の間にできた、小さな砂浜に打ち上げられていた。三人は岩をよじ登り、岬の上に立った。見渡す限りの青い海。いつの間にか、朝になつていた。竜巻に飲み込まれてから後の記憶は、何もない。が、ともかく命だけは助かつたのだ。三人は互いの無事を喜び合い、これからのことを話し合つた。小舟が打ち上げられたのは、陸中海岸浄土ヶ浜。現在の岩手県宮古市だつた。新たに戦いを始めるなら、まずは江戸へ帰らなくては。しかし、三人には金がなかつた。江戸へ帰るどころか、その日の朝飯を食うこともできなかった。三人は刀を土に埋めて、宮古の町へと向かつた。とりあえず、働こう。それが、三人の出した結論だつた。

そこへ、陣人がやってくる。大工の恰好をしている。

丹羽

遠山陣人は大工になつた。彼は貧しい御家人の息子で、幼い頃から父親の内職を手伝わされた。傘を張つたり、爪楊枝を削つたり。手先の器用な彼にとつて、大工はまさに天職だつた。

そこへ、騎一郎がやってくる。農夫の恰好をしている。

丹羽

大岡騎一郎は農家の小作人になった。彼の父親は儒学の学者で、彼自身も昌平校で一、二を争う秀才だった。が、東北の港には、彼の力を活かす仕事がない。生まれて初めての農作業は、彼にとって拷問に等しかった。

そこへ、雷太がやってくる。漁師の恰好をしている。

丹羽

北条雷太は漁師になった。彼は軍艦操練所の出身で、ジョン万次郎から航海術を学んでいた。漁をするのは初めてだったが、船の知識が彼を助けた。彼は毎日、海へ出かけた。漁のない日は、水泳の練習をした。

陣八が去る。

丹羽

それから、一年と二ヶ月後、明治三年七月のことだった。寺の新築工事で、屋根に昇っていた陣八が、足を滑らせて地面に落ちた。報せを聞いた騎一郎と雷太は、すぐに寺へ駆けつけた。が、もはや手遅れ。首の骨が折れて、ほとんど即死の状態だった。二人は亡骸と一晚を過ごし、翌朝、岬へと向かった。三人の乗った小舟が打ち上げられた、あの岬へと。

雷太と騎一郎が座り込む。

騎一郎
雷太

これから、どうします？
どうするとは？

騎一郎

陣八が死んで、俺たちは二人きりになってしまった。それでも、北条殿は戦うって言うんですか？

雷太
騎一郎

当たり前だ。俺は絶対に諦めない。おまえが死んで、俺一人になっても。一人でも何ができるんです。

雷太

何でもできる。百姓どもをたきつけて、一揆を起こしてもいい。江戸の町に火をつけて、政府をまるごと燃やしてもいい。

騎一郎

北条殿の気持ちはわかります。しかし、悪いのは薩長のヤツらです。百姓や町人に、罪はない。

雷太
騎一郎

それはそうだが、他にどんな方法がある。
銭さえあれば、どうにでもなります。北条殿はいくらたまりました？

雷太
騎一郎

まあ、ぼちぼちというところかな。おぬしは？
お恥ずかしい話ですが、俺の財布はほとんど空っぽです。食うのに精一杯で、ためるところではなくて。

雷太
騎一郎

実は俺もそうなんだ。よかった、俺だけでなくて。
こんな俺たちが、どうやって政府と戦うんです。鉄砲一丁買うこともできないのに。

雷太

まさか、おぬしは俺に諦めろと言うのか？

そこへ、陣八がやってくる。白い着物を着ている。

陣八

やっぱりここにいたんですか。

雷太

陣八

騎一郎

陣八

雷太

陣八

雷太
騎一郎

陣八

丹羽

陣八
丹羽

陣八

騎一郎、世の中にはおかしいことがあるもんだな。あの男、死んだ陣八にそっくりだ。

当たり前ですよ、本人なんだから。

馬鹿者。陣八は首の骨が折れたんだぞ。おぬしは折れてないではないか。

なんだか知らないけど、治っちまったみたいなんだ。ほら、触ってみるよ。

こっちへ来るな。あっちへ行け。

冷たいこと言わないでくださいよ、北条殿。一回死んだぐらいで、差別しないではないなあ。

おぬし、本当に陣八なのか？ とすると、おぬしは幽霊なんだな？

でも、こいつ、足がありますよ。それに、幽霊にしては、やけに明るい。

化けて出てきたにしては、あまりにさっぱりした顔をしています。むしろ、

風呂から出てきたって感じですよ。

それは、俺が生き返ったからだよ。(雷太に) そんなふうには怖がってない

で、俺の話聞いてください。

陣八の話はこうだった。ふと気がついてみると、彼はお花畑の真ん中に立

っていた。遠くの方から、「陣八さん、こっちよ」という声がする。それ

は昔、吉原で抱いた太夫の声によく似ていた。陣八はすっかりうれしくな

って、お花畑を駆けた。すると、大きな川に出た。

やべえ、三途の川だ。

と立ち止まったが、声は川の向こうから聞こえる。命を取るか、女を取る

か。もちろん、彼は女を取った。川に飛び込み、抜き手を切る。と、目の

前に、あの竜巻が現れた。

邪魔するな、この野郎！

陣八
雷太

八は一度死んだからな。
俺も北条殿も、不死身の体になっただけで、死ななかつた。それは、運が良かったからだと思っていた。しかし、事実は逆だったんです。俺卷には、俺たちを死なせることができなかった。俺たちは俺卷に勝ったんです。

陣八
騎一郎

俺卷のせいではないですか？

陣八
騎一郎

俺たちは、俺卷に飲み込まれたのに、死ななかつた。それは、運が良かったからだと思っていた。しかし、事実は逆だったんです。俺卷には、俺たちを死なせることができなかった。俺たちは俺卷に勝ったんです。

雷太
騎一郎

そうか。俺たちは勝ったのか。
俺卷には異常な力があります。周りにあるものすべてを引き寄せ、強い力が。俺卷に勝った俺たちは、その力を手に入れた。見た目は他人と変わらないが、生きる力は俺卷なみなんです。

陣八
雷太

ちよつと待ってください。その説が正しいとしたら、騎一郎まで不死身ということになります。

陣八
騎一郎

つまり、俺も仲間というわけだ。
馬鹿を言うな。おぬしは何も怪我をしていないではないか。どうしても仲間になりたくないなら、ここで腹を切れ。それでも死ななかつたら、仲間と認め

陣八
騎一郎

てやる。
よし、切つてやろうではないか。（と懐から短刀を出して）えい！（と腹

陣八
騎一郎

に刺し、地面に突っ伏す）
騎一郎は切つた。が、傷口はすぐに塞がった。

陣八
騎一郎

よし、切つてやろうではないか。（と懐から短刀を出して）えい！（と腹

陣八
騎一郎

に刺し、地面に突っ伏す）
騎一郎は切つた。が、傷口はすぐに塞がった。

陣八
騎一郎

よし、切つてやろうではないか。（と懐から短刀を出して）えい！（と腹

陣八
騎一郎

に刺し、地面に突っ伏す）
騎一郎は切つた。が、傷口はすぐに塞がった。

陣八
騎一郎

よし、切つてやろうではないか。（と懐から短刀を出して）えい！（と腹

騎一郎

陣八

雷太

陣八

雷太

陣八

雷太

陣八

雷太

陣八

雷太

陣八

雷太

陣八

雷太

雷太

（起き上がった）あー、痛かった。悪かったな、疑ったりして。

そうとわかったら、すぐに出発だ。

どこへ？

決まっているだろう、江戸へ行くんだ。新たに戦いを始めるんだ。

まだ諦めてなかったんですか？

諦めるもんか。確かに、俺も一度は迷った。しかし、自分が死なないとわ

かったら、俄然、勇気が湧いてきた。俺たちは、千人の味方を手に入れた

のと同じなんだ。

千人だろうが、二千人だろうが、政府を倒すことなんかできませんよ。

正面からぶつかっても、歯が立たないのはわかっている。だから、一人ず

つ殺すんだ。失敗しても、俺たちはすぐに生き返る。だから、最後には必

ず勝つ。

そんなことをして、何になるんです。俺たちが殺さなくても、ヤツらはい

つか死ぬんですよ。

だから、許してやれと言うのか？ そんなことをしたら、上野で死んだ仲

間はどうなる。箱館で死んだ仲間はどうなる。おぬしは仲間の仇が討ちた

くないのか？

討ちたくない。

なんだと？

人が死ぬのを見るのは、もうこりごりだ。やりたかったら、騎一郎と二人

でやってくください。

（陣八の胸ぐらをつかんで）貴様、それでも武士か！ 大工のふりをして

騎一
郎
陣八

いるうちに、武士の魂をなくしたのか！
北条殿、やめてください！（と雷太の腕をつかむ）

騎一
郎
陣八

（雷太を突き飛ばして）まだわからないんですか、北条殿。俺たちの戦いは、もう終わってるんですよ。（と歩き出す）
どこへ行く。

陣八
騎一
郎

（立ち止まって）江戸へは二人で行ってくれ。俺はここでお別れだ。
この町に残るのか？

雷太
陣八

いや、別の町へ行く。生き返ったところを、和尚に見られちゃったからな。もうこの町にはいられない。運が良ければ、またいつか会えるだろう。それまで、達者でな。（と歩き出す）
待て、陣八。

陣八

（立ち止まって）もうやめましょう。これ以上、話をしても、喧嘩になるだけです。

雷太
陣八
雷太

おぬし、約束を忘れてないか。竜巻に飲み込まれる前にした約束を。
死ぬも一緒、生きるも一緒。
一緒というのは、いつもそばにいらんことだ。おぬしを一人で行かせたまるか。

陣八
騎一
郎

北条殿。
俺も一緒に行くぞ。

陣八

（雷太に）旅は道連れって言いますからね。まあ、俺たちの旅はかなり長くなりそうだけど。

雷太・陣八・騎一郎が去る。

丹羽

明治三年七月、三人は浄土ヶ浜を旅立った。が、彼らは気づいてなかった。自分たちが死なないというだけでなく、老いないというのを。彼らは不
死身になったのではなく、不老不死になったのだ。永遠の若さを手に入れ
た時、人はどんな気持ちになるのだろう。彼らの場合は地獄だった。が、
その地獄に気づくのは、ずっと先の話なのだ。

丹羽が去る。

ナオがやってくる。アルバムを持っている。椅子に座って、アルバムを開く。そこへ、
しずえがやってくる。

しずえ

おばあちゃん、何してるの？（とアルバムを覗き込む）

ナオ

（アルバムを閉じて）何でもない。

しずえ

隠すことないでしょう？ 私に見られたら、困るものなの？

ナオ

困りやせんけど、恥ずかしいけえ。

しずえ

わかった。アルバムね？ おばあちゃんが若くてキレイだった頃の写真と

ナオ

か、貼ってあるの？

しずえ

キレイだった？

ナオ

まさか、今でもキレイだって言いたいの？

しずえ

ビビアン・リーは死ぬまでビビアン・リーじゃった。

ナオ

なるほどね。昔から、「腐っても鯛」って言うもんね。

しずえ

ウチは腐っちよってるって言うんかね。

ナオ

おばあちゃんの場合は、「干からびてもウナギ」って感じかな。

しずえ

帰れ。パーティーは中止じゃ。

しずえ

わかった、わかった。おばあちゃんは今でもキレイよ。ミスおばあちゃん
コンテストに出たら、優勝間違いなし。だから、そのアルバム、見せて。

ナオ
しずえ
ナオ
しずえ
ナオ
しずえ
ナオ
しずえ
ナオ
しずえ
ナオ
しずえ
ナオ
しずえ
しずえ

嘘つきには見せん。

まあ、そう言わないで。(とアルバムを開いて)へえ、これ、女学校の時の写真？

卒業式じゃね。ウチは十八じゃった。

この頃は、まだ干からびてないね。結婚したのは、卒業してすぐ？

違う。しばらくは、ウチの手伝いをやっちゃった。

おばあちゃんの家って、何屋さんだっけ？

結構大きな料亭じゃった。ウチは一人娘じゃったけえ、婿を取って跡を継

ぐはずじゃった。ほいじゃけど、二十歳の時に、家を飛び出した。

どうして？

好きな人ができたんじゃけど、親に反対されたんよ。

それじゃ、駆け落ちしたってこと？

そんななスキャンダラスなことはしちよらん。荷物をまとめて、相手の家に

転がり込んだだけじゃ。

それがヒカリのおじいちゃんてわけか。どんな人だったの？

ええ男じゃった。

そうだろ。で、何をしてたの？

あれほどええ男は、北公次か江木利夫ぐらいしかおらんね。

それはよくわかったから、どんな仕事してたの？

漁師をやっちゃった。漁師っちゅうと、頭の中には酒と女のことしか入っ

ちよらん。そんな感じがするじゃろう？ほいじゃけど、あの人は違う

た。初めて会った時、あの人は何をしちよったと思う？

何だろ。

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

浜辺で竹刀を振つちよった。学校の先生や駐在さんならともかく、剣道をやっちよる漁師なんて、下関じゃあの人だけじゃった。

亡くなったのはいつ？

ウチは二十五じゃった。漁に出かけて、そのまま帰ってこんかった。

そう言えば、北条って人と知り合ったのも、ちょうど同じ頃よね？

ああ。

その人、おばあちゃんとはどういう関係？ 近所に住んでたっただけじゃ

ないんでしょう？

なんでそう思うんかね。

だって、手紙に北条って名前が出てきたら、いきなりアルバムなんか持つ

てきて。北条って人の写真を見ようと思っただんじやないの？

あんた、頭がええんじやね。見た目より。

見た目より、は余計よ。

ほいじゃけど、手紙に出てきた北条さんは、ウチの知っちよる北条さんと

は別人じゃろう。

それはまだわからないよ。続きを読んでみないと。

読んで。

でも、そろそろ食事の支度を始めないと。

そんなもん、日が暮れてからでも、間に合うじやろう。読んで。

仕方ないなあ。まだワインも買いに行つてないのに。(と便箋を出して、

読む)「それから一週間は、何事もなく過ぎました。北条君は二度と姿を

現さなかつたし、チョコレートケーキも届かなかつた。去年も一昨年も、

クリスマスの一週間前には届いたのに」

ナオ
しずえ
ヒカリも結構楽しみにしちゃったんじゃない。毎年、謎の人物からケーキが届
だって、ちよっとロマンチックじゃない。毎年、謎の人物からケーキが届
くなんて。

ナオ
しずえ
ウチは薄気味悪いとしか思わんね。
イヤね、年寄りには夢がなくて。「試験の採点をして、二学期の成績をつけ

ると、終業式はすぐ目の前。今年もやっと終わりか、と一息ついていたと
ころへ、またあの記者がやってきたのです」

ヒカリ・佐々木がやってくる。

ヒカリ
結局、私の記事はどうなったんですか？ あれから毎朝、新聞をチェック

してますけど、まだ載ってないですよね？

佐々木
朝倉先生はうちの新聞を講読してくださいさってるんですか？

ヒカリ
私、新聞は取ってないんです。学校にあれば、読めるから。

佐々木
見かけによらず、ケチなんです。まあ、気が変わったら、ぜひうちの新

聞をお願いします。

ヒカリ
考えておきます。で、私の記事は？

佐々木
実はまだ迷ってるんです。いや、先生のことには必ず書くつもりですよ。し

かし、この前の取材だけじゃ、何か足りないような気がして。それで、

ヒカリ
もう一度、お邪魔したわけです。

公演が始まるんです。チケットは一枚四八〇〇円なんですけど。

実は、来週から

そこへ、鳥居教頭がやってくる。

鳥居教頭

ヒカリ

佐々木

ヒカリ

鳥居教頭

ヒカリ

鳥居教頭

ヒカリ

鳥居教頭

ヒカリ

鳥居教頭

ヒカリ

鳥居教頭

ヒカリ

鳥居教頭

ヒカリ

鳥居教頭

佐々木

鳥居教頭

鳥居教頭

朝倉先生、職員室で商売するのはやめてください。違いますよ。私はお金を取ろうなんて思ってません。

じゃ、招待券をくれるんですか？

どうぞどうぞ。ただし、一枚だけですよ。

じゃ、私も一枚。

え？ 教頭先生も？

冗談ですよ。誰が演劇なんか見るもんですか。ところで、あなたのクラスの村越大地ですが、赤点を三つも取ったそうですね？

数学と化学と英語です。中間までは、クラスで十番以内に入ってたのに。

なぜそんな点を取ったのか、本人に聞いてみましたか？

いいえ。何度か廊下で呼び止めたんですけど、私とは話をしたくないみたいで。

何か、嫌われるようなことをしたんですか？ まさか、今みたいに、チケ

ットを売りつけたとか。

見損なわないでください。いくらノルマがきついからって、生徒にそんな

真似しません。

だったら、何も遠慮することはない。今すぐここに呼んで、話を聞くべき

です。

僕も同席していいですか？ 朝倉先生がお説教するところを見てみたいん

で。

別に構いませんよ。構わないですよ、朝倉先生？

ヒカリ
鳥居教頭

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

ヒカリ

私はやめた方がいいと思います。

なぜですか。

村越君がいやがるからです。たぶん。

僕は何も言いませんよ。黙って、横で見てるだけですから。

どうしてそんなに村越君に興味を持つんですか？ 佐々木さんは村越君と

どういう関係なんですか？

なぜそんなことを聞くんですか？

この前、佐々木さんが来た時、村越君に言われたんです。あいつの取材を

断ってください。あいつは嘘つきですって。

そうですか。あいつ、そんなことを言いましたか。

村越君、何かやっただんですか？

何かって？

たとえ、暴走族の仲間とオヤジ狩りをして、相手に重傷を負わせたとか、

佐々木さんはその犯人を追っていて、村越君に目をつけた。それで、真相

を探るために、私を取材するって嘘をついて、この学校に来た。

村越は暴走族に入ってるんですか？

いいえ。あくまでも、たとえばの話です。

女優さんだけあって、想像力が豊かですね。しかし、芝居と現実はずう。

僕はあなたを取材に来たんです。大地じゃなくて。

今、大地って呼びましたよね？ やっぱり、村越君のことは前から知って

たんですか？

ええ。会うのは十年ぶりですけどね。

そこへ、柳生先輩がやってくる。

柳生先輩

失礼します。丹羽先生はいらっしゃいますか。

鳥居教頭

まだ教室から戻ってないと思うけど。

柳生先輩

そうですか。では、ここで待たせていただきます。

鳥居教頭

どうぞ、ご自由に。

佐々木

あの、彼は？

鳥居教頭

剣道部の部長の柳生宗太郎です。

そこへ、丹羽がやってくる。

丹羽

あー、疲れた。教室っていうのは、どうして一日であんなに汚れるのかな。

柳生先輩

まるで、教室全体が一つのゴミ箱のようですよ。

丹羽

丹羽先生。

柳生先輩

あ、柳生。俺に何か用か。

丹羽

今日の稽古には出席していただけますか。

ヒカリ

悪いな。まだ期末の採点が終わってなくて。え？ 昨日、終わったって言ってませんでしたっけ？ それで、一人で祝いするんだって、白木屋へ。

鳥居教頭

一人でですか？ 淋しいですね。

柳生先輩

(丹羽に) 採点が終わったら、出席する。そういうお約束でしたよね？

丹羽

ああ。でも、今度は成績表をつけないと。

柳生先輩

男に二言はないはずですよ。さあ、行きましょう。(と丹羽の腕をつかむ)

柳生先輩が丹羽を引きずって、去る。

佐々木 いいんですか、放っておいて。

鳥居教頭 仕方ないんです。丹羽先生は剣道部の顧問ですから。

佐々木 へえ。あの人が、剣道ができるんですか。

鳥居教頭 できませんよ。うちの学校に来るまで、竹刀を握ったこともなかった。で

も、剣道部は人数が少ないですからね。ちゃんとした稽古をするためには

猫の手も借りたいんです。ちよつと見てきてもいいですか？

何だかおもしろそうだな。それはまた後で。

佐々木 あの、私の取材は？

佐々木が去る。

ヒカリ 佐々木さんは知ってるんですね？ 村越君が剣道部だって。

鳥居教頭 さあ、どうでしょう。

ヒカリ 今日だって、授業が終わってから、来たし。最初から、剣道部の練習を見

るつもりだったんでしょ？

ヒカリが去る。反対側へ、鳥居教頭が去る。

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

ナオ

しずえ

また話がズレてきた。北条さんはどうなったん？

やっぱり、北条さんのことが気になるのね？

別に。ほいじゃけど、その手紙の主題は、誰がケーキを届けてくれるかじ

やろう？ 国語の先生のくせに、主題を忘れるとは情けない。

それがそうでもないのよ。この後、関係してくるんだから。

はあ、ええ。北条さんが出てくるまで、ちいと寝てくるけえ。

ダメダメ。そんなことをしたら、話がわからなくなるじゃない。

ウチをなめてもらっちゃ困るっちゃ。先週の火曜サスペンスじゃって、最

後の十五分を見ただけで、ちゃんと泣けた。

テレビと現実は違うでしょう？ それに、北条さんはもうこの時は学校に

来てたの。別の場所にいたのよ。

どこにどこに？

「私は急いで佐々木さんの後を追いかけてきました。でも、剣道場にはいなか

った。途中でどこかに寄り道したのかもしれない。校舎の中を探し回って、

やっと見つけたのが図書室でした」

別の場所に、雷太がやってくる。手にはケーキの箱。

雷太

騎一郎！ 騎一郎！

反対側から、騎一郎がやってくる。手には本。

騎一郎

お呼びですか、北条殿。

雷太

ヒカリが職員室を出た。俺たちも急いで後を追うんだ。

騎一郎

珍しいですね、こんなに早く帰るなんて。

雷太

いや、あの様子は、誰かを追いかけているという感じだったな。

騎一郎

例のケーキ屋の息子ですか？

雷太

おそらくそうだろう。やっぱり、あの二人の間には何かあるんだ。

騎一郎

先に行つててください。俺はこの本が読み終わったら、追いかけますから。

雷太

それは駄目だ。おぬしも一緒に来てくれないと困る。

騎一郎

なぜです。

雷太

実は、銭がなくなった。このケーキを買つて、財布の中身は三十円になつた。

騎一郎

言つておきますけど、俺に頼るのはやめてくださいよ。

雷太

まさか、おぬしも三十円しかないのか？

騎一郎

もう少しありますよ。しかし、俺はコンビニのバイトで生計を建てている

雷太

んです。一人で暮らしていくのもやっとなのに、いきなり居候が転がり込

騎一郎

んできたから、今月は大赤字。

雷太

大晦日まで凌げば、陣八が来るだろう。

騎一郎

それまで、どうやって食べていくんですか。

雷太

何とかなる。たとえば栄養失調になつても、俺たちは死なないんだから。

騎一郎
雷太
騎一郎

しかし、腹は減りますよ。
武士なら、それぐらい我慢しろ。さあ、行くぞ。
わかりました。この本を返してきます。

騎一郎が去る。反対側から、董がやってくる。本を持っている。

董
雷太
董
雷太
董
雷太
董
雷太

あなた、ここで何をしてるんですか？
すいません、職員室はどこですか？ 私、迷子になってしまいました。
嘘についても無駄です。あなた、復讐しに来たんでしょう？
俺が？ 誰に？
村越先輩にですよ。でも、正面からぶつかっては勝ち目がない。それで、
先輩と特別な関係にある私を人質にしようって。
特別な関係とは何だ。
それ以上、近付かないで。近付いたら、舌を噛みます。

そこへ、騎一郎が戻ってくる。

騎一郎
董
雷太
董
雷太
騎一郎

お待たせしました、北条殿。
信じられない。かよわい娘を二人がかりで襲うなんて。
すまん。おぬしが何を言っているのか、俺には全くわからない。
ごまかさないで。(と本を振り上げる)
おや、その本は司馬遼太郎の『新撰組血風録』じゃないか。ちよっと貸してくれ。(と本を取る)

董 騎一郎

あ、その本は先輩にあげようと思ったのに。君は土方さんが好きなのか？

董 騎一郎

違います。沖田総司です。

董 騎一郎

へえ、あんな小男のどこがいいのかな。（本を奪い取って）総司は小男じゃありません。子母沢寛の『新撰組始末

騎一郎

記』には、背が高くて、痩せていたって。

騎一郎

ああ、あの本は嘘が多いからなあ。実際の沖田は五尺三寸。メートル法に

董 騎一郎

直せば、一五九センチだ。

董 騎一郎

どうしてそんなことが断言できるんですか？

董 騎一郎

それは実際に会ったからだよ。

雷太

いつ？ どこで？

雷太

騎一郎、その話はまた今度にしろ。（董に）それじゃ、村越先輩と特別な

雷太

関係にある娘、また逢おう。

そこへ、佐々木がやってくる。

佐々木

なんだ、先客がいたのか。

雷太

俺たちは今、出ていくところだ。そこをどいてくれ。

佐々木

見たところ、この先生じゃないようだな。かと言って、生徒でもない。

雷太

部外者が図書室に何の用だ。

佐々木

それはこっちの科白だ。

雷太

なるほど。確かに、俺も部外者だ。責める資格はないよな。

佐々木が雷太に倒れかかる。雷太が佐々木を支える。

雷太

佐々木

どうした。気分でも悪いのか。ちよつと胸が苦しくてね。十五分だけ休もうと思つて、ここへ来たんだ。

(と雷太の手を振り払う)

雷太

佐々木

保健室に行けば、ベッドがあるぞ。

そんな所で寝たら、先生たちになんて言われるか。新聞記者はどこへ行つてもよそ者扱いだ。まあ、慣れてるがね。

そこへ、ヒカリがやってくる。雷太と騎一郎がヒカリに背を向ける。

ヒカリ

佐々木

ヒカリ

佐々木

こんな所にいた。剣道部の練習、もう始まつてますよ。先に行つてもらえますか。僕もすぐに追いかけますから。顔色が良くないですね。風邪でも引いてるんですか？

実は、先月まで入院してましてね。まだ体力が回復してないから、疲れやすいですよ。

ヒカリ

佐々木

入院で、病気が何か？

肺ガンです。まじめに聞いているのに、冗談はやめてください。さあ、行きましょう。

ヒカリが佐々木の腕を引っ張つて、去る。

雷太

騎一郎、俺たちも行くぞ。

騎一郎

雷太

董

雷太

俺はここに残ります。この子がどうしても話を聞きたいって言うんで。しかし。聞かせてくれないと、あなたたちのこと、バラしますよ。わかった。後でまた来る。

雷太が去る。

反対側へ、董・騎一郎が去る。

しずえ

「図書室には、井沢さんがいました。あと、男の人が二人。どこかで見たような後ろ姿だったけど、その時は気がつかなかった。私は佐々木さんと一緒に、剣道場に向かいました」

別の場所に、

丹羽・大地・柳生先輩がやってくる。三人とも剣道着を着て、竹刀を持つ

丹羽

柳生先輩

柳生、顧問として、一つ意見があるんだが。どうぞ。

剣道部は野球部じゃないんだ。十キロも走る必要はないと思う。それでもどうしても走りたいって言うんなら、体操服で走るべきだと思う。

柳生先輩

丹羽

柳生先輩

丹羽

柳生先輩

ご意見ありがとうございます。お礼は言っても、聞く気はないんだな？では、次は素振りです。面打ち百本、始め。ちよつと待て。おまえは見てるだけか？誰かが見てないと、型を直すことができません。

丹羽
柳生先輩

丹羽

柳生先輩

丹羽

大地

丹羽

柳生先輩

よし、俺が見てる。気づいたことがあつたら、すぐに言うから。
丹羽先生、勝負しましょう。

なぜだ。
部員を指導するのは、一番強い者であるべきです。先生が指導なさりたい

なら、その前に僕を倒してください。

俺がいない時はどうしてるんだ。柳生が見てたら、やるのは大地一人にな

っちゃうんじゃないか。

そうですよ。いつも俺一人でやっています。

つまり、どこにも逃げ場はないってことか。

丹羽・大地が素振りを始める。そこへ、ヒカリ・佐々木がやってくる。大地が素振りを止める。

柳生先輩

大地

柳生先輩

大地

佐々木

ヒカリ

佐々木

丹羽

どうした、村越。なぜ途中で止める。

すいません。用事を思い出したんで、帰ります。

駄目だ。授業に早引けはあっても、稽古に早引けはない。

しかし。

部長さんの言う通りだ。途中で逃げ出すなんて、男らしくないぞ。

佐々木さん。

（柳生先輩に）いや、口出しして、申し訳ない。稽古を続けてください。その前に、あなたを紹介しますよ。柳生、この人は佐々木さんと言って、読振新聞で記者をなさっている。今日は、朝倉先生の取材にいらっしやっ

佐々木

たんだ。でも、どうして剣道場へ？
教頭先生に話を聞いて、ちよつと興味を持ちましてね。しかし、顧問も入
れて、三人とは驚いたな。これじゃ、団体戦に出られないし、他校と練習
試合もできない。

柳生先輩

剣道は本来、一対一でやるものです。

佐々木

それはそうだけど、いつも同じ相手とやっていると、飽きるだろう。

柳生先輩

自分の敵は自分自身です。相手は問題じゃありません。

佐々木

柳生君は切磋琢磨という言葉を知っていますか。

柳生先輩

せつしゃたくあん？

ヒカリ

（佐々木に）柳生君は国語が苦手なんです。（柳生先輩に）切磋琢磨って

いうのはね、中国の詩経っていう本に出てくるの。意味は、友人同士が互
いに励まし合って向上を図ること。

佐々木

一人の人間にできることなんて、たかが知れてる。沖田総司だって、一人

で強くなつたわけじゃない。

大地

（竹刀で床を叩いて）朝倉先生、そいつを連れて行ってください。

佐々木

すぐに行くよ。おまえが話をしてくれたら。

大地

朝倉先生。

佐々木

大地、頼む。

大地が佐々木に打ちかかる。佐々木が避ける。そこへ、雷太が飛び出す。手にはケーキ
の箱。柳生先輩の竹刀を取り、大地に向ける。

柳生先輩

貴様、何をする！

雷太 悪いが、持ってきてくれ。(と箱を渡して、大地に) 素手の人間に打ちかか

大地 るとは。そんなヤツに、剣を持つ資格はない。

ヒカリ うるさい！

丹羽 村越君、やめて。

佐々木 どうしたんだ、大地。なぜそんなにムキになるんだ。

雷太 それは、彼が僕を許せないからですよ。しかし、せっかく喧嘩を売られた

佐々木 んだ。買わない手はない。丹羽先生、竹刀を貸してください。

雷太 やめておけ。病人に勝てる相手ではない。

佐々木 それはどうか。(と丹羽の竹刀を取って) 俺も高校時代は剣道部だった

丹羽 んだ。一応、二段の腕前だ。

大地 しかし、防具もつけないで、試合をさせるわけには行きません。

佐々木 試合じゃない。これは喧嘩だよな、大地？

大地 うるさい！

大地が佐々木に打ちかかる。雷太が大地の竹刀を受けて、払う。大地が後ずさりして、柳生先輩にぶつかる。柳生先輩が箱を地面に落とす。

雷太 あっ！ 貴様、またしても。

大地 落としたのは柳生先輩だ。

柳生先輩 (雷太に) 俺に持たせたのはあんただ。

雷太 黙れ！

雷太が大地に打ちかかる。大地が竹刀を落とす。そこへ、鳥居教頭がやってくる。

鳥居教頭
柳生先輩
鳥居教頭
佐々木
鳥居教頭
丹羽
鳥居教頭
佐々木
鳥居教頭

そこまで。
大丈夫か、村越。(と駆け寄る)
佐々木さん、うちの生徒と喧嘩は困ります。
すいません。つい、興奮してしまつて。
どうしてもやりたいなら、防具をつけて、試合としてやってください。
教頭先生、止めに来たんじゃありませんか？
試合開始は明後日の正午です。いいですね、佐々木さん？
ええ。
村越君は？

大地が去る。
後を追つて、柳生先輩が去る。雷太が箱を拾う。

雷太
佐々木
雷太
佐々木
ヒカリ
鳥居教頭
丹羽
鳥居教頭
ヒカリ

もう三十円しかないのに。
そのケーキは何だ。彼女にプレゼントか？
こんな物がプレゼントできるか。俺が食うんだ。また一人で。
良かったら、手伝おうか？
佐々木さん、教えてください。あなたは村越君とどういう関係なんですか？
父親ですよ。
父親？
佐々木さんは、村越君が小学一年の時、お母さんと離婚したんです。(佐々木に)すいません、言っちゃいました。
(佐々木に)どうして話してくれなかつたんですか？

鳥居教頭

ヒカリ

雷太

雷太が去る。

ヒカリ・丹羽・鳥居教頭・佐々木も去る。

あなたに言ったら、変に気を回すでしょう。だから、私が止めたんです。
(雷太に) ところで、あなたは誰ですか？

この人は私の幼なじみの土方君です。(雷太に) どうしてあなたがここに
いるのよ。

ちよつと通りかかってな。それではヒカリ、また逢おう。

しずえ　やっぱり、あの人、おかしいよ。絶対におかしい。
 ナオ　ウチの知っちよる北条さんも、おかしな人じゃった。

しずえ　そうなの？
 ナオ　酒も飲まんし、煙草も吸わん。一人者のくせに、女も口説かん。ウチみた

しずえ　いなキレイな娘が話しかけても、ちつともうれしそうな顔をせんかった。
 ナオ　それは、本当にうれしくなかったのかもよ。

しずえ　ウチ以外の娘でも、話は同じじゃった。一体何が楽しくて生きちよるのか。
 ナオ　誰にもわからんかった。

しずえ　その中にはあつた？　北条さんの写真。
 ナオ　一枚だけあつた。見たいかね？

しずえ　見たい見たい。
 ナオ　よし、見せちやる。最後まで読み終わったら。

しずえ　「職員室に戻ると、佐々木さんは『また来ます』と言って、帰っていきま
 ナオ　した。私はどうしても村越君のことが気になって、稽古に行く前に、ケ
 しずえ　キ屋に寄ることにしました」

別の場所に、大地がやってくる。

大地
ただいま。

そこへ、ヒカリ・恭子がやってくる。

恭子
ヒカリ
大地、あんた、どこに寄り道してたの？ 朝倉先生、ずっと待ってたのよ。
（大地に）いきなり来て、ごめんね。でも、どうしてもあなたと話がしたくて。

大地
恭子
俺はしたくありません。（と行こうとする）
先生から聞いたよ。あの人、学校に来たんだったって？ 今日だけじゃなくて、先週も。

ヒカリ
佐々木さんは私の取材に来たって言っていました。（大地に）でも、本当はあなたに会いに来たのよ。

大地
恭子
俺に用があるなら、ここに来ればいいんだ
来たでしょう、何回も。でも、あんたは部屋に閉じこもって、会おうとしなかつたじゃない。

大地
俺には母さんの気持ちがわからないよ。

大地
恭子
私の気持ち？

大地
恭子
どうしてあいつを家の中に入れられるんだ。どうして話ができるんだ。あいつはもう赤の他人じゃないか。

大地
恭子
他人じゃないよ。あの人は今でもあんたの父親なんだから。

大地
恭子
十年も会いにこない父親がいるかよ。

大地
恭子
それは、仕事が忙しかったから。
また、それか。仕事が忙しいって言えば、何でも通るって思ってるんだ。

ヒカリ

大地

新聞記者って、本当に忙しいみたいよ。私の大学の同級生にも記者になった人がいるんだけど、お休みなんてあつてないようものだって。知ってますよ、そんなこと。母さんが病気になった時だって、あいつは結局、病院に來なかつた。

ヒカリ

それって、いつの話？

恭子

私たちが離婚する前です。大地が小学一年の時。

大地

母さんが手術室に入った後、俺は一人で廊下で待つてた。俺は、母さんが死んじゃうんじゃないかって、心配で心配で堪らなかつた。だから、何度も会社に電話した。早く来て、早く来て。でも、あいつは來なかつた。手術が終わつても、朝になつても。

恭子

(ヒカリに) 私もあの時はさすがに腹が立ちましてね。退院と同時に、実家に戻つたんです。

大地

それなのに、もう許すのか？

恭子

仕方なかつたのよ。あの人にはあの人の事情があつたんだから。

大地

俺はそうは思わない。あいつは自分のことしか考えてないんだ。もし俺が死にそうになつても、あいつはきつと來ない。そんなやつが、どうして父親つて言えるんだよ。

そこへ、雷太・董・騎一郎がやつてくる。董は本を持っている。

董

ヒカリ

(恭子に) 遅くなつて、すいません。すぐに支度しますから。

ヒカリ

あら、土方君。また來たの？

雷太

ああ。しかし、今日もゆつくりしていけないんだ。(騎一郎に) 行くぞ。

雷太
ヒカリ

大地

ヒカリ

大地

ヒカリ

大地
ヒカリ

大地

恭子

大地

恭子

雷太

ヒカリ

雷太

（騎一郎の肩をつかんで）やめろと言うのが、わからんのか。行くぞ。土方君、待って。村越君、この人に謝って。

俺が？ どうして。

この人は私を騙してなんかいない。だって、私は前にもこの人に会ってるんだもの。

それは先生の思い過ごしですよ。

じゃ、ケーキはどうなるのよ。今日も剣道場に持ってきたじゃない。

あのケーキが一体何だって言うんです。

私が東京へ来てから、毎年、クリスマスが近くなると、チョコレートケーキが届くの。最初の頃は、田舎の父が送ってくれたんだと、勝手に思ってた。でも、父はそんなことをした覚えはないって。じゃ、一体誰が届けてくれるのか。その答えはこの人だったのよ。

ケーキを届けるなら、先生の家に行けばいいんだ。どうして学校に来る必要があるんです。

大地、もうやめなさいってば。

（雷太に）あんたはうちの店を覗きに來たんだ。俺の様子を探りに來たんだ。そうだろう？

（雷太に）そうなんですか？

確かに、大地の様子は探った。しかし、それはヒカリを守るためだ。

私を？

おまえはこの前、こいつに突き飛ばされたじゃないか。確かに、先に手を出したのは、丹羽って男だったかもしれない。しかし、また同じようなことが起きて、おまえが怪我でもしたら。

ヒカリ

恭子

雷太

そんなこと、村越君がするわけないじゃない。
（雷太に）そうですね。うちの息子に限って、そんなこと。
俺は、ヒカリを傷つけるヤツは絶対に許さない。たとえば、ヒカリの教え子であつても。

大地

雷太

ヒカリ

偉そうなことを言うな。赤の他人のくせに。

他人じゃない。俺はヒカリのことを、赤ん坊の頃から知ってるんだ。

赤ん坊の頃から？

いや、もっと前から。おまえが生まれる前からだ。

そこへ、陣八がやってくる。

陣八

雷太

騎一郎

陣八

騎一郎

陣八

北条殿！

陣八、おぬし、なぜここへ？

俺が電話したんですよ。金がないから、持ってきてくれて。

おぬしがついていながら、この騒ぎは何だ。

すまん、俺もつい、興奮してしまつて。

（雷太に）気持ちわかりますが、それ以上、話してはいけません。とり

あえず、ここを出しましょう。

その前に、コーヒーを飲んでいってくださいよ。息子が失礼なことを言っ

た、お詫びもしたいし。

コーヒー豆、ちゃんと買っておきましたよ。

悪いが、急ぎの用があるんだ。さあ、北条殿。

それでは董ちゃん、また逢おう。

董
陣八
騎一郎

雷太・陣八・騎一郎が去る。反対側へ、恭子・大地・董が去る。

しずえ　また新しいのが現れた。一体、この人たちは何なの？

ヒカリ　わからないから、こうして手紙を書いたのよ。

しずえ　北条って人、とんでもないことを言ってたよね。ヒカリのことを、生まれる前から知ってたって。

ヒカリ　やっぱり、あの人は同級生なんかじゃない。私は覚えてないけど、昔、下

関に住んでたのかもしれない。しずえは市役所で働いてるんだから、昔の

住民票とか読めるよね？　悪いけど、調べてみてくれないかな？

しずえ　ダメダメ。そんなことをして、課長にバレてみない。私はクビよ。

ヒカリ　ダメなら、おばあちゃんに聞いてみて。しずえの返事を、楽しみに待っています。十二月二十二日、朝倉ヒカリ。

ヒカリが去る。

しずえ　これで、手紙はおしまい。

ナオ　最後に来た人、陣八っちゅう名前じゃったね？

しずえ　そうよ。おばあちゃん、知ってるの？

ナオ　それから、北条さんと一緒に来た人、騎一郎っちゅう名前じゃったね？

しずえ　おばあちゃん、何か思い出したの？

ナオ　全部思い出した。今から四十八年前。昭和三十年の十二月じゃった。

しずえ　その時、一体何があったのよ。

ナオ
しずえ
ナオ
しずえ
ナオ
しずえ
ナオ
しずえ
ナオ
しずえ

ウチの前にも現れたんよ。陣八さんと騎一郎さんが。
でも、それは今から四十八年も前の話なんでしょう？
東京へ行こう。
え？ 今、何て言った？
今すぐ、東京へ行こう。
今すぐって、クリスマス・パーティーはどうするのよ。
そんなもん、また来年やればええ。
どうしていきなりそんなことを言い出すのよ。東京なんかへ何しに行くのよ。
北条さんに会いに行くんよ。

しずえが頷く。ナオ・しずえが去る。

丹羽がやってくる。ノートを持っている。

丹羽

(ノートを開いて) 明治三月七月、三人は現在の岩手県釜石市にたどりついた。その翌年には宮城県石巻市に、さらにその翌年には福島県いわき市に。こうして、三人は東北の港を次から次へと渡り歩いていった。それにはもちろん、理由がある。田舎の町は人が少ない。三人のうちの誰かが怪我をして、それがすぐに治ったりすると、たちまち噂になる。そして、その町にはいられなくなってしまうのだ。初めのうちは仕方がないと諦めていたが、何度も続くとなさすがにイヤになってくる。金は一向にたまるまいし、周りに気を遣いながら暮らすのも疲れる。もっと自由に暮らしたい。そう思ったら、もっと大きな町へ行くしかない。こうして、明治十年九月、三人は現在の東京都、当時の東京府にたどりついた。

そこへ、陣人がやってくる。大工の恰好をしている。

丹羽

遠山陣人は東京でも大工になった。文明開化の東京は、町全体が工事中と違った状態。大工の仕事は腐るほどあった。彼はその中から、鉄道を作る仕事を選んだ。品川・横浜間に鉄道が開通したのは、明治五年五月。生ま

れて初めて蒸気機関車を見た彼は、そのカッコよさに一目惚れしてしまったのだ。

そこへ、騎一郎がやってくる。書生の恰好をしている。

丹羽

大岡騎一郎は大学生になった。もちろん、彼には戸籍がないので、正式に入学することはできない。だから、学生のふりをして、授業に潜り込んだのだ。彼が通った東京開成学校は、この年、名前を東京大学と改めた。つまり、彼は東大の一期生となったのだ。が、学問だけでは食べていけないので、夜は人力車の車夫として、東京の町を駆け回った。

そこへ、雷太がやってくる。漁師の恰好をしている。手には新聞。

丹羽

北条雷太は東京でも漁師になった。が――

雷太・陣八・騎一郎が顔を合わせる。

雷太

おい、二人ともこれを見ろ。(と新聞を差し出す)

陣八

どうしたんですか、血相を変えて。

雷太

いいから、黙って、この記事を読め。西郷隆盛が死んだんだ。

陣八

あの西郷が？(と新聞を取る)

騎一郎

(新聞を覗き込んで) 一体、どんなふうに死んだんですか？

雷太

腹を撃たれて、もやはこれまでと思っただらう。部下に命じて、首を斬

陣八
雷太
騎一郎

雷太

陣八
雷太

雷太
陣八
雷太
陣八
雷太

らせたそうだ。
さすがは西郷。最期まで男らしいヤツだ。
感心している場合か。ヤツは俺たちを江戸から追い出した男なんだぞ。
それは十年も前の話でしょう。確かに、あの時は政府の親玉でした。しか
し、今は政府に対して反乱を起こした、勇士ですよ。
何が勇士だ。ヤツが政府を辞めたのは、大久保と仲違いしたからだろう。
薩長のヤツらがやることは、十年前と少しも変わっていない。自分と考えの
違う者は、皆殺しにしないと気が済まんのだ。このままヤツらのやりたい
ようにやらせてみる。日本はとんでもないことになるぞ。
まさか、また戦おうって言うのではないでしょうね？
どうせおぬしはイヤだと言うんだらう。
当たり前です。ヤツらを殺しても殺さなくても、結果は同じなんだ。百年
も経てば、みんな死ぬんですよ。
俺たちはそれをただじっと待つだけなのか？
百年なんてすぐです。何しろ、俺たちは永遠に生き続けるんだから。
陣八、おぬしは考えたことがないか。俺たちはなぜ不死身になったのか。
それは騎一郎が言った通り、竜巻の力を手に入れたからでしょう。
俺が言ってるのは、原因ではない。目的だ。俺たちが不死身になったのは、
何のためだ。天は俺たちに何をしろと言っているんだ。
まさか、戦えとは言っていないでしょう。
天は俺たちにこう言っている。確かに、おまえたちは戦に負けた。日本は
薩長のヤツらのものになった。が、それで諦めてはいけけない。ヤツらに任
せていたら、日本はきつとダメになる。それを食い止めるために、おまえ

騎一郎

雷太

騎一郎

雷太

陣八

雷太

陣八

雷太

陣八

騎一郎

陣八

雷太

陣八

雷太

陣八

雷太

たちに永遠の命を授けよう。
なるほどね。しかし、その説には一つだけ弱点がある。

弱点だと？

それは、なぜ俺たちなのかということ。幕府には、俺たちより強いヤツがいっぱいいた。それなのに、なぜ俺たちが選ばれたんです。

一番最後まで戦おうとしたからだ。天はそんな俺たちに不死身の体という

褒美をくれたんだ。

褒美ですか。

そう。

北条殿は、不死身の体が入って、そんなにうれいんですか？ 俺たち

ち、不死身になってから、一度でも得したことでもありませんか？

おぬしは首の骨が折れたのに、生き返ったではないか。

しかし、周りに知られて、宮古の町にはいられなくなりました。釜石でもそう

です。石巻でもそうです。不死身であることがバレないように、周りに気

を遣わなければならなくなりました。

おかげで、友人を持つこともできなくなりました。

女房を持つこともできなくなりました。(雷太に)それがなぜだかわかります

か？ 俺みたいな子供が生まれたら、かわいそうだからですよ。

なぜかわいそうなんだ。

決まっているではないですか。変だからですよ。人は死ぬのが自然なんです。

いつかは死ぬと思うから、それまで精一杯生きようと思える。俺たち

みたいな出来損ないは、三人だけでたくさんだ。

俺を仲間に入れるな。俺は常に精一杯生きようとしている。

陣八

雷太

陣八

雷太
陣八

雷太
陣八

雷太
陣八

雷太
陣八

雷太

ご立派ですね。しかし、俺は北条殿とは違う。永遠に生き続けるのかと思つたら、百年ぐらいいはどうってことない。国が荒れようが荒れまいが、俺の知つたことではないんです。

それが武士の言う言葉か。国のためなら、命も投げ捨てる。武士とはそういうものではないのか。

何が、命も投げ捨てる、だ。正直に認めたらどうです。五稜郭から逃げ出したのは、死にたくなかつたからだつて。

俺は違う。

違うというなら、それでもいい。しかし、俺は死にたくなかつた。降伏して、獄に放り込まれるのもイヤだつた。天はそれに気づいてたんです。だから、竜巻に俺を飲み込ませたんだ。そんなに死にたくないなら、永遠に生きるがいい。天はそう言つてるんです。不死身の体は褒美じゃなくて、罰なんです。

俺は違う。俺は死にたくないなんて思つてなかつた。

もういい。二人ともやめましょう。俺たちはなぜ不死身になつたのか。そんなことは誰にもわからないんです。

しかし、陣八郎。

とにかく、俺たちは生きるしかないんだ。どうせ生きるなら、精一杯生きろ。俺は精一杯女を口説くかな。

北条殿が国のために生きると言うなら、それでもいい。しかし、人を殺すのはもうやめてください。俺たちは、もう武士ではないのだから。

俺は武士だ。

騎一郎

四民平等の世の中です。人を殺せば、罪になるんです。だから、もう戦いはやめてください。戦い以外の、別のことを精一杯やるんです。わかりましたか？

雷太

ああ。

騎一郎

本当にわかりましたか？

雷太

わかった。わかったら、一人にしてくれ。

陣八・騎一郎が去る。

丹羽

しかし、彼にはわかってなかった。次の日から、彼は一人で戦いを始めた。最初の標的は薩摩出身の大久保利通。当時の役職は内務卿だったが、実質的には政府の頂点に立っていた男。彼は半年の間、大久保の尾行を続けた。そして、ついにつかんだチャンスが、東京府紀尾井坂。

雷太

（刀を抜いて、斬りかかる）

ところが、彼が斬りかかろうとすると、横から数人の男が飛び出してきた。そして、大久保を斬ってしまった。

雷太

割り込みするな！

次の標的は長州出身の伊藤博文。伊藤は韓国統監として、日本と韓国の間を忙しく往復していた。彼は漁船に乗って海を渡り、ハルピンまで追いかけた。

雷太
丹羽

（刀を抜いて、斬りかかる）

ところが、彼が斬りかかろうとすると、またしても、横から別の男が飛び出してきた。そして、伊藤を撃ってしまった。犯人は韓国の民族運動家・

雷太
丹羽

雷太

丹羽

雷太

丹羽

雷太

丹羽

安重根。

安重根するんだ！（作・西川浩幸）

次の標的は長州出身の山縣有朋。すでに時代は明治から大正へと移り、山縣は戊辰戦争の最後の生き残りとなっていた。こいつを逃したら、もう次はない。彼は山縣が暮らす小田原の別荘へと向かった。

（刀を抜いて、斬りかかる）

ところが、彼が別荘に忍び込んだ時、山縣はすでに老衰で死んでいた。

もっと長生きしろ！

こうして、彼の戦いは終わった。彼は一人も殺してないのに、相手はみんな死んでしまった。しかし、彼は死なない。死ぬことができない。

（懐から手紙を取り出して、読む）「しばらく旅に出ます。探さないでください。雷太」

彼は一人で旅に出た。二人とした約束を破って。彼にはもはや生きる目的がなかった。自分の命など、もうどうでもよかった。彼は死にたかった。が、どうしても死ねなかった。そして、日本全国の港を渡り歩き、ついに山口県下関市にたどりついた。

そこへ、徳造がやってくる。

徳造

雷太

徳造

雷太

あんた、そんな所で何をしちよるんじや。

海を見ている。

好きななんか、海が。

大嫌いだ。しかし、俺には他に生きる場所がない。

徳造

雷太

徳造

雷太

徳造

雷太

徳造

あんた、船乗りか？

いや、漁師だ。できれば、この町で働きたいと思っている。

（雷太の手をつかんで、掌を見る）確かに、漁師の手をしちよる。ほいじ

やけど、このタコは何じゃ。

俺は剣道が好きでな。たまに一人で稽古しているんだ。

ついてこい。（と歩き出す）

え？

ワシの船を見せちやる。なりは小さいが、玄界灘の荒波にも負けん、丈夫な船じゃ。

雷太・徳造が去る。

丹羽

昭和二十年九月、彼は山口県下関市にたどりついた。そこで、彼はやっと見つけた。彼が生きる目的を。

丹羽が去る。

ヒカリがやってくる。反対側から、鳥居教頭がやってくる。

鳥居教頭
ヒカリ

もう終わったんですか、大掃除？

ええ。「一年の終わりなんだから、しつかりやろう」って言ったたら、みんな、頑張ってくれて。おかげで、机も窓もピカピカです。

鳥居教頭
ヒカリ

あなたの劇団の公演はいつからでしたっけ？

鳥居教頭
ヒカリ

明日が仕込みで、明後日から本番です。

鳥居教頭
ヒカリ

じゃ、今日が最後の稽古？
そうなんですよ。だから、今日はちよつと早めに失礼しようかと思ってるんですが。

鳥居教頭
ヒカリ

あなた、そのために、大掃除を適当に終わらせましたね？

そんなことしてません。本当は、みんなに頼んだんです。「一分でも早く稽古に行きたいから、急いでやって。でも、絶対に手は抜かないで。ちょっとでも汚れてたら、教頭先生に厭味を言われるから」って。

鳥居教頭
ヒカリ

残念ですけど、今日は稽古には行けませんよ。

鳥居教頭
ヒカリ

え？ どうしてですか？
今日は十二月二十四日。クリスマスイブですけど、それが何か？

そこへ、佐々木がやってくる。袋に入った竹刀を持っている。

佐々木　クリスマスイブに芝居の稽古なんて、悲しいですね。

ヒカリ　いいんです。私の恋人は芝居ですから。

佐々木　申し訳ありませんが、恋人に会いに行くのは、試合が終わってからにして

もらえませんか。

ヒカリ　試合って、まさか。

鳥居教頭　佐々木さんと村越君の試合ですよ。忘れたんですか？

ヒカリ　そういうわけじゃないですけど、本当にやるんですか？

佐々木　僕はそのために来たんですよ。

ヒカリ　私、冗談だと思ってました。だって、親子が決闘するなんて。

鳥居教頭　決闘じゃない、試合です。三本勝負で、二本先に取った方が勝ち。(佐々

木に)それでいいですよね？

佐々木　結構です。大地ごときに、一本も取らせません。二本連取で片づけ

てやります。(と袋から竹刀を出す)

ヒカリ　その竹刀は？

佐々木　一昨日の帰りに買ったんです。高校時代に使ってたヤツは、田舎の家に置

いてきたんです。(と素振りをする)

鳥居教頭　なかなか様になってるじゃないですか。

佐々木　当たり前ですよ。こう見えても、鳥取県大会で一回戦まで行ったんですか

ら。

鳥居教頭　つまり、初戦で負けたんですね？

佐々木
鳥居教頭

(竹刀を止め、胸を押さえる)
どうしました、佐々木さん？

そこへ、丹羽がやってくる。

丹羽

教頭先生、どうしたんですか？

ヒカリ

佐々木さんが竹刀を振ってたら、急に。

鳥居教頭

丹羽先生、椅子を持ってきてください。早く。

丹羽が椅子を持ってくる。鳥居教頭が佐々木を座らせる。

丹羽

ひどい汗ですね。一体、何百回振ったんです。

ヒカリ

ほんの五、六回ですよ。

丹羽

それだけで、この汗ですか？ 体の具合でも悪いのかな。

佐々木

すいませんでした。ちよつと胸が苦しくなつて。

ヒカリ

胸？ それって、もしかして。

佐々木

言つたでしょう？ 僕は先月まで、入院してたんです。肺ガンで。

ヒカリ

そんな。私はつきり、冗談かと。

佐々木

僕は嘘はつきませんよ。

ヒカリ

でも、私の取材に来たつていうのは嘘だったじゃないですか。

佐々木

確かに、本当の目的は大地でした。でも、あなたの記事は必ず書きます。

鳥居教頭

試合は中止にした方がいいようですね。

佐々木

とんでもない。せっかく、大地と剣道ができるんだ。このチャンスを逃がす手はない。(と立ち上がる)

鳥居教頭
佐々木

でも、足が震えてますよ。立つだけで精一杯じゃないですか。悔しいけど、十五分だけ横になりたい。保健室のベッドを貸してもらえますか？

鳥居教頭

それより、病院へ行ったらどうです。

佐々木

ちよつと休めば、痛みは取れます。大地を待たせるわけにはいかないし。

丹羽

あの、大地はもう帰りましたよ。

佐々木

帰った？ いつですか？

丹羽

ついさつき、下駄箱の所で会ったんです。僕が「試合はしていかないのか」って聞いたたら、「俺はやるとは言ってません」て。

佐々木

朝倉先生、大地を連れ戻してもらえませんか。

ヒカリ

でも、その体で試合は無理ですよ。

佐々木

あいつと会えるのは、今日が最後かもしれないです。お願いします。

鳥居教頭

朝倉先生、佐々木さんの言う通りにしてあげてください。

ヒカリ

でも、今日は最後の稽古なんです。

鳥居教頭

あなたはこの前、なんて言いました？ 教師も女優も、どっちも大切だって言ったでしょう。ここは劇場じゃない。学校なんですよ。

ヒカリ

わかりました。行ってきます。

ヒカリが去る。反対側へ、丹羽・鳥居教頭・佐々木が去る。
別の場所へ、大地がやってくる。後を追って、董がやってくる。手には本。

大 董
地

村越先輩、どこへ行くんですか？
今日はクリスマススイブだろう？ 急いで家に帰って、店の手伝いをしな
い
と。

大 董
地

またまた。その前に、寄る所があるくせに。
何だよ、寄る所って。

大 董
地

隠しても無駄ですよ。これ、どうぞ。（と本を差し出す）

大 董
地

（受け取って、表紙を読む）『幕末剣心伝』？

大 董
地

その中に、沖田総司の必殺技・三段突きが図解入りで載ってます。急いで
マスターして、決闘で使ってください。

大 董
地

決闘って？

だから、隠しても無駄ですってば。これから剣道場に行って、お父さんと
戦うんでしよう？ 昨日、丹羽先生から聞きましたよ。

大 董
地

あの、おしやべり教師。

私、先輩のこと、見直しました。先輩なら、やっぱり、沖田総司になれる
かもしれない。

大 董
地

井沢、おまえはいろんなことを誤解してる。俺は沖田になる気はないし、
決闘をする気もない。（と本を差し出す）

そこへ、雷太がやってくる。

雷 太
大 地

しかし、おまえは約束をした。
してない。あれは、教頭先生が勝手に決めたことだ。俺はやるとは言っ
て
ない。

雷太
大地

だが、やらないとも言っていない。沈黙は承諾と同じだ。誰がそんなことを決めたんだ。

大司教様です。『カリオストロの城』の結婚式の場面で、大司教様はこう言ってるんです。「クラリス・ド・カリオストロよ、この婚姻に同意するか。異議なき時は沈黙をもって答えよ」って。沈黙するってことは、承諾するってことなんですよ。

井沢、頼むから、口出ししないでくれ。

父上はおまえを待ってる。すぐに学校に戻るんだ。

断る。

それなら、力づくで連れ戻すだけだ。

どうしてあいつの味方をするんだ。やっぱり、あんたも記者なのか？

そうじゃない。おまえの父上と会ったのは、一昨日が初めてだ。場所は図書室。話をしてる最中に、いきなり俺に倒れかかってきた。知ってたか？

父上は先月まで入院していたそうだ。入院？

私も聞きました。お父さんは肺ガンだったんです。退院できたんだから、

もう治ったんだと思いますけど。

嘘だ。

しかし、父上は俺に倒れかかってきた。体の具合はけっして良くない。

嘘だ！

大地
雷太
大地

大地が走り出す。行く手に、陣八・騎一郎が立ち塞がる。

陣八

大地

陣八

雷太

大地

大地

どこへ行く。
おまえら、あいつの仲間か？
ガギのくせに、生意気な口をききやがって。北条殿、こういうヤツには話をしても無駄ですよ。ゲンコツでわからせてやらないと。
（大地に）父上に会ってやれ。会って、話をしてやれ。
うるさい！

大地が雷太を突き飛ばし、走り去る。雷太が「待て！」と叫んで、後を追う。

陣八

陣八

陣八

陣八

陣八、俺たちも行くぞ。
董ちゃん、一つだけ教えてくれ。君はやつぱり、大地が好きなのか？
下らんことを言っていないで、大地を追うんだ。
私も行きます。

董・陣八・陣八が去る。

雷太が走ってくる。

雷太 大地！ 大地！

反対側から、ヒカリ・恭子がやってくる。

ヒカリ なんだ、土方君か。

雷太 大地は戻ってきてないか？

ヒカリ まだよ。でも、あなたが村越君に何の用？

雷太 今日は試合の日だろう。もうすぐ日が暮れるというのに、どこへ行ったんだ。

ヒカリ 私も昼過ぎからここで待ってるのよ。さつき学校に電話してみたけど、教室にも剣道場にもいないって。

恭子 今頃、渋谷で映画でも見てるんじゃないかな。『マトリックス・レボリユーションズ』、見たがってたから。

ヒカリ そんな。佐々木さんはずっと待ってるのに。

雷太 (恭子に) なぜ大地に言わなかった。父上が肺ガンだということを。土方君、どうして知ってるの？

雷太
恭子

（恭子に）言えば、大地も折れたはずだ。会ってもいいと思っただはずだ。あの人に止められたんです。「俺の体のことは、絶対に大地に言うな。俺が自分で話すから」って。

雷太

そうか。そのために、大地に会いに来たのか。

そこへ、董が走ってくる。

董
雷太

北条さん！ 先輩がいました！
どこに？

董
雷太

私のクラスの子が碑文谷公園で見たって。陣八さんと騎一郎さんは先に向かいました。

雷太

ヒカリ、おまえは学校で待っている。大地は俺が必ず連れていく。

雷太・董が走り去る。

ヒカリ

お母さん、佐々木さんのガンは治ったんですよね？

恭子
ヒカリ

大地に言わないって、約束してくれませんか？
え？ それじゃ。

恭子

胸を開いたら、あちこちに転移してて、もう手の施しようがなかったんですって。だから、どこも切らずに、すぐに縫合したって。あと半年、長く

ヒカリ

一年の命だそうです。絶対に言わないでくださいね。
言えるわけじゃないじゃないですか。私なんか。

そこへ、ナオ・しずえがやってくる。

しずえ

ヒカリ

しずえ

恭子

ヒカリ

ナオ

恭子

ヒカリ

しずえ

ヒカリ

ナオ

ヒカリ

ナオ

恭子

しずえ

恭子

ナオ

しずえ

ヒカリ

しずえ

ヒカリ。

しずえ。おばあちゃんまで。いつ、東京に来たの？

あなたの手紙をおばあちゃんに見せたら、いきなり「東京へ行く」って言い出して。四時の飛行機に飛び乗って、ついさつき羽田に着いたの。

朝倉先生、そちらの方は？

酒井しずえ。下関に住んでる、私の幼なじみです。こっちは私の祖母です。

(恭子に)ヒカリがいつもお世話になってます。

いいえ、こちらこそ。

(しずえに)でも、私がかこいるって、よくわかったね。

学校に電話したのよ。そしたら、村越君の家に行ったって。

で、私に何の用？

うちは北条さんに会いに来たんよ。

おばあちゃん、北条さんを知ってるの？

知っちゃう。その人の名前が北条雷太なら、間違いなく知っちゃう。

その人なら、たった今まで、ここにいましたよ。でも、うちの息子を探し

に、碑文谷公園へ。

碑文谷公園？

でも、うちの息子を捕まえたら、学校へ連れていくって。

よし、学校へ行こう。

ヒカリ、おばあちゃんを学校まで案内してあげて。

どうしたのよ、しずえ。そんなに怖い顔をして。

しずえ
恭子

いいから、早く。
私も一緒に行きます。おじいちゃんに一言言ってきますから、ちょっと待っててください。

恭子が去る。

ヒカリ
しずえ
ヒカリ
ナオ

北条さんて、やっぱり、うちの近所に住んでたの？
四十八年前までね。
四十八年前？ てことは、昭和三十年？
初めて会うたのは、その十年前じゃった。ウチは二十じゃった。

そこへ、雷太・徳造がやってくる。

ナオ

昭和二十年十二月、ウチは荷物をまとめて、ウチの旦那になった人の家へ転がり込んだ。そこで会うたのが北条さんじゃった。旦那の友達で、同じ船に乗っちよる漁師じゃった。妙に古臭い言葉を使う人で、まるで江戸時代のお武家さんみたいじゃった。ウチより十歳年上じゃったけど、実際はもっと年を取っちよるように見えた。

雷太、こいつが俺の嫁さんだ。

(雷太に) 朝倉ナオです。初めまして。

ナオさんか。徳造にはもったいないぐらいのべっぴんさんだな。
またまた。北条さんは、奥さんはおらんのん？
いない。俺は妻を持ったことなど、一度もない。

徳造
ナオ
雷太
ナオ
雷太

ナオ

雷太

ナオ

雷太

ナオ

雷太

ナオ

雷太

ナオ

し
ず
え

ナオ

し
ず
え

雷太

徳
造

なんで？

それは、「この人」って思う人と出会えなかったからだ。あんたは。

出会うた。ほいじゃけえ、一緒になったんよ。

そうか。だったら、その人を大切にするんだな。

言われんでもするっちゃ。北条さんも、ウチの人をよろしくお願いします。

任せておけ。俺はこの道、八十年だ。

八十年？

とにかく、俺と一緒にいれば、死ぬことはない。だから、安心して待ってろ。

それから、北条さんとは、何度も顔を合わせるようになった。ウチの旦那

は酒が好きじゃったが、北条さんは一滴も飲まん。ほいじゃけど、二人は

妙に気が合うようで、漁のない時は浜辺で剣道をやっちゃった。ほうよ。

ウチの旦那に剣道を教えたのは、北条さんじゃったんよ。

昭和二十五年八月。二人は漁に出かけた。

その日は、前の晩から風が強かった。嵐が来そうな雲行きじゃったが、二

人の船は漁に出ることになった。ウチは心配じゃったが、北条さんは笑っ

てこう言った。

徳造のことは任せておけ。俺と一緒にいれば、死ぬことはない。

そして、船は嵐に巻き込まれた。玄界灘の真ん中で、船は方角を見失った。

叩きつける雨と風。二人の体はずぶ濡れになった。襲いかかる黒い波。二

人は立っていることもできなくなった。そして、恐竜のような大波がのし

かかってきた。船が傾き、二人は海へと放り出された。

雷太！

しずえ

雷太

しずえ

雷太

徳造

雷太

しずえ

雷太

徳造

雷太

徳造

雷太

徳造

雷太

しずえ

気づいた時には、海の中だった。雷太は必死に泳いで、海面に出た。右も左も上も下も真っ黒。しかし、遠くに白い点が見えた。徳造のジャンパーだ。

徳造！

彼は必死で泳いだ。白い点は見えたり見えなくなったり。なかなか近付かない。それでも狂ったように水を掻き、ついに徳造のジャンパーをつかんだ。

徳造、しっかりしろ！

ここは？

海だ。泳げ、徳造！ どっちが陸かわからんが、とにかく泳ぐんだ！

二人は必死で泳いだ。嵐の中を泳いだ。何時間も何時間も泳いだ。そして、ついに徳造が力尽きた。

徳造！ しっかりしろ！

ダメじゃ。もう泳げん。

何を言ってるんだ。泳がないと、死んじまうぞ。

左足が動かんのじゃ。船から放り出された時、折れたらしい。

足の一本や二本、なんだ。男だったら、気合を出せ。剣道の稽古を思い出すんだ。

ワシは一度も雷太に勝てんかった。

そうだ。おまえは一度も勝てなかった。悔しいだろう。だったら、下関に帰って、もう一度勝負をするんだ。

雷太は徳造を背負って泳ぎ始めた。波は二人を容赦なく海へに引きずり込んだ。二人は時に、離れ離れになった。が、雷太は海中で徳造をつかみ、

徳造

雷太

徳造

雷太

ナオ

徳造

雷太

徳造

雷太

徳造

しずえ

徳造が去る。

雷太

また海面へと上がるのだった。しかし、雷太の力もいつかは尽きる。徳造を背負ったまま、波に揺れるだけになった。

はあ、もうええ。ワシはここに置いていってくれ。

バカ。そんなことができるか。

雷太一人じゃつたら、助かるかもしれん。ワシと一緒に死ぬことはない。

しかし、俺には約束がある。

徳造のことは任せておけ。

二人とも死んだら、ナオはどうなる。せめておまえだけでも、生きて帰つてくれ。

ダメだ。俺たちは二人で帰るんだ。

ナオを頼む。

俺は断る。ナオさんはおまえの女房だ。おまえが死ぬまで面倒を見るんだ。

約束だ。ナオを頼む。

雷太は泳いだ。必死で泳いだ。徳造を背負って、ナオを指して泳いだ。

が、次第に彼の意識は遠のき、いつしか波に漂うだけとなった。

目を開けると、俺は海の上に浮かんでいた。空は真つ青に晴れていた。嵐はとうの昔に過ぎ去ったのだ。俺は一人だった。徳造の姿はどこにもなかった。水平線まで見渡しても、ヤツの白いジャンパーはなかった。俺は泣いた。俺はヤツを死なせてしまった。俺も一緒に死にたかった。しかし、また死ねなかった。

し
ず
え

雷
太
し
ず
え
ナ
オ

し
ず
え
ナ
オ
雷
太
ナ
オ
雷
太
ナ
オ
雷
太
ナ
オ
し
ず
え
ナ
オ

雷太が下関に帰ったのは、漁に出てから一週間後のことだった。ナオは泣いた。雷太は、「約束を破ってすまなかった」と謝った。が、ナオは許さなかつた。けつして口をきこうとしなかつた。

しかし、俺には約束がある。
ナオを頼む。

北条さんは次の日から毎日、家へ来るようになった。その日に稼いだお金を、黙って玄関に置いていく。ウチはありがたいと言わんと受け取つた。ウチには三つになる息子がおつた。息子を食べさせていくには、どうしてもお金がいる。ウチも働き始めたが、女一人の稼ぎはたかが知れちよる。北条さんのお金だけが頼りじやつた。

ある日、ナオは雷太を呼び止めた。
こんな置いていつて、あんたは暮らしていけるんかね。

何とかなる。俺は一人者だからな。

ご飯はちゃんと食べちよるん？

心配するな。俺は食わなくても死なないんだ。

そんなわけにもいかんじやろう。良かったら、一緒に食べていかん？

いいのか。

ええつちや。どうせあんたがくれたお金で作つたものじやけえ。

次の日から、雷太は毎晩、ナオの家で食事をするようになった。

北条さんは何を作つても、うまいと言つてくれた。それがお世辞じやつたとしても、ウチはうれしかつた。ウチの旦那が死んで、ウチは一人ぼつたになつたよな気がしちよつた。息子がバカにされんように生きていこうと必死じやつた。ほいじやけど、ウチは一人じやなかつた。それがようや

し
ず
え
ナ
オ

し
ず
え
ナ
オ

雷
太

ナ
オ

雷
太

ナ
オ

雷
太

ナ
オ

雷
太

ナ
オ

雷
太

ナ
オ

くわかつたんよ。

そして、五年の月日が流れた。

ウチは次第に旦那のことを忘れていった。忘れちゃいけないと思うんじゃないけど、気づいた時には北条さんの顔をボーっと見ちよる。北条さんが「おやすみ」っちゅうて帰ると、淋しゅうなる。時々、「帰らんとつて」っちゅう言葉が、喉元までこみ上げてくる。それを我慢するのが、だんだん苦しゅうなってきた。

そして、昭和三十年十二月。

ウチはとうとう決心した。ウチの旦那が死んで五年になる。他の男に心を移しても、きつと許してくれるじやろう。それに、相手は北条さんなんじやし。じゃけえ、十二月のある晩――

おやすみ。

待って、北条さん。

何だ。

ウチ、北条さんに話があるんよ。

実は、俺も話があるんだ。

話って？

本当は黙ってようと思ってたんだが、俺は下関を出ることになった。なんで。

俺の仲間が迎えに来たんだ。昔からの知り合いでな。俺のことを探して、日本全国の港を歩き回ってたんだ。そいつらが今朝、家へ来て、一緒に東京へ行こうって言うんだ。あんた、行くつもりなんかいね。

雷太

あんたの息子も八つになつた。もう俺がいなくても大丈夫だろう。

ナオ

本当にそう思うんかね。あんたがおらんでも大丈夫じゃって。

雷太

俺は一つの場所でジツとしてるわけにはいかないんだ。それなのに、あんなや徳造と知り合ったおかげで、十年もここにいてしまった。

ナオ

あんたと初めて会ったのは、十年前じゃったね。ほいじゃけど、あんたはあの頃のままじゃね。

雷太

(顔をそむけて) 何かあつたら、必ず助けに来る。約束するから。

ナオ

どうしても行くんかね。

雷太

あんたは俺がいなくても生きていける。そのうちまた、「この人」って思う人とう人と出会えるだろう。

ナオ

あんたも出会えるよええね、「この人」って思う人に。

雷太

俺はもう出会った。それだけで、俺はこの先、一人でも生きていける。

ナオ

そこへ、陣八・騎一郎がやってくる。

そこへ、陣八・騎一郎がやってくる。

騎一郎

北条殿。

雷太

(ナオに) 陣八と騎一郎だ。

陣八

出発は明日の朝でもいいんじゃないですか？

雷太

いや、今夜発とう。明日になると、別れが辛くなる。(ナオに) 達者でな。ナ

オ

北条さん。

雷太

約束だ。何かあつたら、必ず助けに来る。

ナオ

北条さん。

雷太・陣八・騎一郎が去る。

ヒカリ 学校へ行こう。北条さんに会いに行こう。

ナオが頷く。そこへ、恭子が走ってくる。

恭子 すいませんね、遅くなって。おじいちゃんが「この忙しい時なんだ」つて怒っちゃって。
しずえ 行くよ、おばあちゃん。

ヒカリ・ナオ・しずえ・恭子が去る。

鳥居教頭・佐々木がやってくる。佐々木は剣道着を着て、竹刀と面を持っている。

鳥居教頭
佐々木
やっぱり来てませんね。

鳥居教頭
佐々木
ここにいと、体が冷えますよ。保健室に戻りましょう。

鳥居教頭
佐々木
いや、僕はしばらくここで待ちます。教頭先生はもう家に帰ってください。

鳥居教頭
佐々木
もう少し七時ですよ。いい加減、諦めたらどうです。

鳥居教頭
佐々木
ご心配なく。僕は待つことには慣れてますから。

鳥居教頭
佐々木
七時間ぐらい、なんてことないですよ。僕は入院するまで、警視庁の担当

鳥居教頭
佐々木
都内を走り回って。張り込みなんかしよっちゅうです。

鳥居教頭
佐々木
へえ、記者が張り込みを。

鳥居教頭
佐々木
最長記録は一週間です。容疑者の愛人のマンションの前に車を止めて。

鳥居教頭
佐々木
それで、容疑者は姿を現したんですか？

鳥居教頭
佐々木
残念ながら、空振りでした。でも、僕の取材が犯人逮捕につながったこと

鳥居教頭
佐々木
だってあるんですよ。

鳥居教頭
佐々木

おもしろそうな仕事ですね。
いや、実におもしろかった。記者になって、今年で二十三年ですが、本当にあつという間でした。おかげで、仕事以外のことを気にする暇がなかった。家内が出ていったのも、大地が口をきいてくれないのも、すべては身から出たサビです。

鳥居教頭

でも、まだ手遅れじゃありませんよ。

そこへ、丹羽がやってくる。

丹羽

教頭先生、お電話です。

鳥居教頭

誰から？

丹羽

警察からです。うちの生徒が碑文谷公園で乱闘騒ぎを起こしたみたいで。

鳥居教頭

ちよつと聞きたいことがあるつて。
珍しいですね、乱闘なんて。(佐々木に) すぐに戻ります。

丹羽・鳥居教頭が去る。

佐々木

まだ手遅れじゃありませんよ、か。俺も昔はそう思ってたな。頑張れば、何とかなる。諦めずに努力すれば、必ず道は開ける。二十三年努力してきた、一体どんな道が開けたっていうんだ。何もかも手遅れだ。気づいた時には行き止まりじゃないか。

そこへ、雷太がやってくる。

雷太

佐々木

雷太

佐々木

雷太

佐々木

雷太

佐々木

雷太

佐々木

雷太

佐々木

雷太

佐々木

雷太

佐々木

そう思うなら、さっさと家へ帰れ。

しかし、俺には約束がある。

大地は約束をしたつもりなどなかったようだぞ。

そのようだな。まあ、ここまで来たなら、意地だ。何時間でも待ってやる。

大地と話したかったら、なぜ最初に正直に言わなかった。自分の体のことを。

言っても、大地は変わらなかっただろう。

それはどうかな。

あいつは俺を憎んでる。まあ、それも仕方ない。俺は、父親としてやるべきことを何一つしなかったからな。正直に言おうか。恭子と大地が家を出

ていつて、俺はホッとしたんだ。これからは、心置きなく仕事ができるって。そう思うことで、淋しさをごまかそうとしたんだろう。

違う。俺は淋しくなんかなかった。

それなら、一人で死ぬのも淋しくないはずだ。大地と話をしたいなどと思

わないはずだ。

あんた、一体誰なんだ。なぜ俺に付きまとうんだ。

おぬしが大地の父親で、大地がヒカリの教え子だからだ。

要するに、朝倉先生のためか。

ああ。しかし、おぬしは俺の知り合いによく似ているんだ。俺はそいつを

見殺しにした。あの時のような思いは二度と味わいたくない。同情はやめてくれ。

雷太 正直に言え。おぬしは後悔しているんだろう、今までの人生を。
佐々木 ああ、その通りだ。今さら後悔しても、手遅れだな。
雷太 馬鹿者。この世に手遅れなどいうことはない。

そこへ、陣八と騎一郎が大地を担いで、やってくる。大地は剣道着を着ている。後から、
堇もやってくる。手には竹刀と面。

騎一郎 お待たせしました、北条殿。
大地 下ろせよ！ 下ろせてば！
雷太 よし、下ろしてやれ。

陣八と騎一郎が大地を放り投げる。堇が大地に駆け寄る。

堇 大丈夫ですか、先輩？
佐々木 大地、遅かったな。

大地が出口に向かう。陣八・騎一郎が立ち塞がる。

陣八 おっと。逃げられると思うなよ。
大地 邪魔するな。俺は帰る。
陣八 おぬしというやつはまだわかっていないようだな。(と大地の頭を小突いて)十六、七のガキが、大人に向かって、生意気な口をきくな。「邪魔するな」じゃなくて、「邪魔しないでください」だろう。

大地
陣八
大地

邪魔しないでください。
断る。せつかくここまで担いできたのに、すぐに帰らせてたまるか。
嘘つき。

そこへ、鳥居教頭・丹羽がやってくる。

丹羽

大地、やっと来たのか。

鳥居教頭

(雷太に) 碑文谷公園で乱闘騒ぎを起こしたのは、あなた方ですか？

雷太

なぜそれを？

鳥居教頭

今、警察から電話があったんです。うちの生徒が三人組のチンピラと喧嘩してたつて。すぐにあなたのことが頭に浮かんだけど、しらばっくれてやりました

雷太

それはかたじけない。陣八、騎一郎、行くぞ。

騎一郎

え？ 試合は見ていかないんですか？

雷太

俺たちは外で見張りだ。(佐々木に) 最後ぐらい、正直になれ。後悔しなくなかったら。

雷太・陣八・騎一郎が去る。

佐々木

大地、そんなに俺と試合するのがいやか。

大地

俺はあんたと会わないって決めた。口をきかないって決めた。それなのに、

丹羽

試合なんかできるか。

でも、最初に打ちかかかっていったのはおまえじゃないか。

大地
鳥居教頭

あれは、あいつが話しかけてきたから。防具をつけずに打ちかかるのは、明らかに暴力です。この人に文句があるなら、言葉で言えば良かった。

大地

俺は口をきかないって決めたんだ。

大地

俺はやりたくない。あくまでも、試合として。

大地

一昨日、おまえは俺を叩きたいと思ったんだろう。

大地

それでもいいんだ。今日こそ、俺を叩くチャンスだ。思う存分、打ちかかってこい。

大地

クソ！（と董の手から竹刀を取る）

大地

大地。

大地

やればいいんだろう、やれば。そのかわり、どうなっても知らないからな。

大地

望むところだ。（と面を着け始める）

大地

（大地に）先輩、お手伝いします。（と面を渡す）

大地

丹羽先生、審判をお願いします。

大地

でも、僕はルールを知らないんですが。

そこへ、柳生先輩がやってくる。

柳生先輩

審判なら、僕が。

丹羽

柳生、絶妙のタイミングだな。

柳生先輩

更衣室で七時間待った甲斐がありました。それでは試合を始めます。二人

とも、向かい合って。礼。

佐々木・大地が向かい合う。礼をする。

柳生先輩

始め。

大地が佐々木に打ちかかる。佐々木がかわす。大地がさらに打ちかかる。佐々木がかわして、打ち返す。大地がかわして、打ち返す。佐々木がひざまずく。

丹羽

審判、今のは？

柳生先輩

浅い。あれでは一本にはなりません。（佐々木に）立って。

佐々木が立つ。大地が打ちかかる。佐々木がよろめく。大地がさらに打ちかかる。佐々木が倒れる。大地がさらに打ちかかる。柳生先輩が大地の腕をつかむ。大地が柳生先輩を突き飛ばし、佐々木に打ちかかる。そこへ、雷太が飛び出す。大地の腕をつかむ。

雷太

待て、大地！
うるさい！

雷太

待てというのがわからんのか！（と大地を突き飛ばして）父上が立ち上が

大地

俺はもういやだ。（と面を外し始める）

大地

そう言うな。まだ始まったばかりだ。

大地

あんたは弱すぎる。まるで、枯れ木を叩いてるみたいだ。

大地

枯れ木とはひどいな。よし、そろそろ本気を出すとするか。

大地

もういいよ。あんた、病気なんだろう？

佐々木

誰に聞いた。

僕は何も言ってもませんよ。

丹羽

(佐々木に) すまん、俺がしゃべった。

雷太

(佐々木に) 私も。

佐々木

(大地に) そいつらがなんて言ったか知らないが、俺はもう健康だ。おまえに同情してもらおう必要はない。

大地

嘘だ。

佐々木

嘘じゃない。(と立ち上がった) ほら、かかってこいよ。俺をぶちのめしたいんだらう？

雷太が大地の手から竹刀を取り、佐々木に向ける。

雷太

待て。

佐々木

何の真似だ。

雷太

やつとわかった。おぬしは大地と話がしたいのではない。大地に罰してほしいんだ。そうだらう？

佐々木

違う。

雷太

いや、違わない。結局、おぬしは自分のことしか考えていない。最後の最後まで、自分のために生きるつもりなんだ。

佐々木

ああ、そうだ。そのどこが悪い。

雷太

全部だ。おぬしは大地の父親だらう。父親のくせに、息子に甘えるとは。そんなやつに、父親と名乗る資格はない。

雷太が佐々木に打ちかかる。佐々木が倒れる。そこへ、ヒカリ・ナオ・しずえ・恭子がやってくる。

ヒカリ

北条さん！

雷太

（佐々木に）なぜ正直に淋しいと言わない。一人で死ぬのが怖いと言わない。かっこつけるのもいい加減にしろ。

ヒカリ

（雷太にしがみついて）やめてよ、北条さん！ 佐々木さんは病人なのよ。放せ、ヒカリ。俺はこいつが許せんだ。

雷太

黙れ！

大地が佐々木の手から竹刀を取って、雷太に向ける。

大地 恭子

大地！

（雷太に）他人のあなたに何がわかる。そいつのことは、俺が一番よく知ってるんだ。ワガママで、カッコつけたがりだ。俺の試合を見に来た時も、一番後ろの席に座って、黙って帰っていった。俺に気づかれないように、こそこそと。

大地 佐々木

大地。

（雷太に）そいつは絶対に謝らない。自分が悪いってわかっているのに、謝らない。息子だと思って、なめやがって。本当に最低の父親だ。でもな、あなたにそいつを責める権利はない。責めていいのは俺だけだ。憎んでいいは俺だけだ。

恭子

大地、もういいじゃない。

大地

柳生先輩
鳥居教頭

（佐々木に）あんたは俺がぶちのめす。でも、今じゃない。あんたの病気が治ってからだ。面を外せよ。試合は延期だ。教頭先生。いいでしょう。試合は一年延期します。再試合は来年の今日です。二人ともいいですね？

恭子が佐々木に駆け寄り、面を外す。

恭子

大丈夫？

佐々木

胸が苦しい。保健室まで連れてってくれ。

恭子

大地、肩を貸して。

佐々木

（雷太に）いろいろ世話になったな。

雷太

礼を言うなら、大地に言え。やつを俺を止めなかったら、おぬしは今頃、ぼろ雑巾だ。

佐々木

ああ、そうだな。（と笑う）

大地・柳生先輩が佐々木を抱えて、立ち上がらせる。三人が去る。後を追って、恭子と堇も去る。

鳥居教頭

（雷太に）最後の最後まで邪魔をして。本当に困った人ですね。

丹羽

（雷太に）あなた、本当に何者なんですか？

雷太

おぬしに一言だけ、言っておきたいことがある。

丹羽

何ですか？

雷太
鳥居教頭
丹羽

ヒカリが好きなら、正直に好きだと言え。後悔したくなかったら。
(丹羽に) 私も同意見です。(と歩き出す)
待ってください、教頭先生。勝手に決めつけしないでください。

鳥居教頭が去る。後を追って、丹羽が去る。

ヒカリ
雷太
ヒカリ
雷太
ヒカリ
ナオ
雷太
ヒカリ
雷太
ヒカリ
ヒカリ
雷太
ヒカリ
雷太
ヒカリ
ヒカリ
雷太
ヒカリ
雷太
ヒカリ

北条さん。
何だ。
（笑って）まだ気がつかないの？ 私はさっきから、北条さんて呼んでるのよ。
それがどうした。どんな名前で呼ばれようと、俺は俺だ。
そう。
用があるなら、早く言え。俺はもう帰りたんだ。
実は、あなたに会いたっていう人を連れてきたのよ。誰だかわかる？
さあ、誰だろうな。
下関に住んでる、私のおばあちゃんよ。名前は朝倉ナオ。北条さん、知ってるよね？
さあ、どうだったかな。
惚けてないで、おばあちゃんの方を向いてよ。早く。
（ナオに）あんたがヒカリのばあちゃんか。なかなかのべっぴんさんだな。久しぶりじゃね、北条さん。
俺の名前は北条ではない。土方だ。
しっこいなあ。まだ嘘を続けるつもり？
嘘ではない。俺は嘘と童巻が大嫌いなんだ。だから、今まで一度も嘘をつ

しずえ

雷太

しずえ

雷太

しずえ

雷太

ナオ

雷太

ナオ

雷太

ナオ

雷太

ナオ

雷太

ナオ

雷太

ナオ

雷太

ナオ

雷太

ナオ

雷太

いたことがない。
無駄な抵抗はやめなさいよ。何もかもバレてるんだから。

黙れ、首長竜。

首長竜？ それって、小学校の時の私のあだ名だ。どうして知ってるの？
おまえはヒカリの同級生だろう。ということは、俺の同級生でもあるってわけだ。

でも、卒業アルバムには載ってなかった。

俺は五年で転校したんだ。だから、二人とも覚えてないんだろう。

変わらんね、あんた。

あんたは前にも俺に会ってるのか？

ウチのこと、覚えちよらんの？

俺が下関にいたのは、ずいぶん昔の話だからな。

ほうよ、四十八年も前の話よ。ほいじゃけど、ウチはあんたを忘れたことは一度もない。

光栄だな。俺みたいな男を覚えていてくれたなんて。

せっかく下関から来たのに、そんなことしか言うてくれんのかね。四十八年ぶりに会うたのに。

四十八年ぶりじゃない。俺は毎年、下関に行ってたんだ。

え？

いや、つまり、転校した後も、下関が懐かしくてな。だから、毎年、夏に

なると、下関に遊びに行ってたんだ。

ウチの家にも来たんかね。

ああ。玄関から、中を覗くだけだったかな。

ナオ
雷太
ナオ
雷太

なんで声をかけてくれんかったんかね。
顔を見せたくなかったんだ。俺の顔はちょっと変だから。
変じゃない。年を取らんだけじゃろう。

ナオ

俺はちゃんと年を取る。しかし、もしこの世に年を取らない男がいたら、
そいつはきつと不気味だろうな。女房をもらっても、自分だけは若い頃の
ままなんだ。女房からしたら、きつとイヤだろう。

雷太

ウチは前から知っちゃった。それでもええと思うたんよ。あんたがそばに
おってくれるだけで。
しかし、男の方だって辛いぞ。愛する女がどんどんババアになっていくの
に、自分は変わらないんだ。そばにいるということは、一緒に年を取ると
いうことだ。一緒に喜びと悲しみを味わうということだ。男にはそれがで
きない。だから、出ていくしかないんだ。

そこへ、陣八・騎一郎がやってくる。

陣八

北条殿。

雷太
ヒカリ

待たせて悪かったな。帰ろう。
帰るって、どこへ？

雷太

騎一郎の家へ。俺たちは、毎年、年末に集まることにしているんだ。それ
が約束なんでな。

陣八

死ぬも一緒、生きるも一緒。

騎一郎
ナオ

(ナオに) まあ、年末以外はバラバラなんですけどね。
(雷太に) あんた、今はどこに住んじよるん？

雷太 鳥取の境港だ。しかし、もう五年も暮らしたから、そろそろ他へ移ろうかと思ってる。

ナオ ウチには会いに来てくれんの。下関には毎年行ってるからな。気が向いたら、呼び鈴を鳴らそう。

雷太 待っちよるけえ、来年も。再来年も。

雷太 俺は武士だ。約束は必ず守る。

騎一郎 行きますか、北条殿。

雷太 ナオさん、だったな。

ナオ なんね、北条さん。

雷太 俺のこと、昔と全然変わらないうって言ったな。しかし、あんただって変わらんないよ。全然変わらんないよ。

ナオ お世辞でもうれしいっちゃ。

雷太 何かあったら、必ず助けに来る。じゃあな。

雷太 雷太・陣八・騎一郎が去る。

しずえ 良かったね、おばあちゃん。北条さんに会えて。

しずえ あの人が、ずっとウチのそばにおったんじゃないやね。ウチが気づかんかっただけなんじゃね。

ヒカリ さてと、私たちはどうしようか。いきなり来たから、ホテルも予約してない。やっぱり、ヒカリのアパートに泊まるしかないのかな。

ヒカリ あっ！

ヒカリが床からケーキの箱を持ち上げる。

しずえ

ヒカリ

しずえ

ヒカリ

しずえ

ヒカリ

しずえ

ヒカリ

しずえ

ヒカリ

しずえ

ヒカリ

しずえ

ヒカリ

しずえ

ヒカリ

しずえ

ヒカリ

しずえ

ヒカリ

どうしたの、ヒカリ？
見てよ、これ。ケーキよ。
北条さんが置いていったのね？ いつの間に
思い出した。

あの前に、いつ、どこで会ったか、思い出したのよ。あれは、下関のケーキ屋さんの前。お父さんとお母さんが離婚して、すぐよ。
ご両親が離婚したのって、いつだっけ？
小学五年の十二月。

そうか。だから、あの人、五年の時って言ったのね？
学校が終わって、帰り道。商店街のケーキ屋さんで、シヨーケースを覗いてたの。そうしたら、知らないおじさんが話しかけてきたのよ。「何を見

ている」って。
それが北条さんじゃったんじゃね？

私はチョコレートケーキを見たの。私のお母さんはチョコレートケーキを作るのが得意でね。毎年、クリスマスのために作ってくれたのよ。でも、今年食べられななんだな、と思ったら涙が出てきて。そのことをおじさんに言ったら、買ってくれたの。

(箱を示して) これぐらいのを？
そうそう。で、次の年からは、お父さんに頼んで、買ってもらうようになった。だから、いつの間にか、そのおじさんのことは忘れちゃったの。

しずえ

それで、東京に来て、最初にケーキが届いた時も、お父さんが送ってくれたかと思っただのね？

ヒカリ

普通、そう思うでしょう？ 小五の時に会ったおじさんが届けてくれたなんて、思うわけじゃない。

ナオ

北条さんはずっと見てたんじゃね。あんたのことを。

ヒカリ

私の所にも一年に一度、来てたのよ。まるで、彗星のように。

そこへ、丹羽がやってくる。手にはノート。

丹羽

(ノートを開いて) 平成十五十二月。三人は東京を去った。その時、大岡騎一郎は一五八歳、遠山陣八は一六〇歳。北条雷太は一六五歳。(ノートを閉じて) 以上が僕が書いた記録のすべてです。僕は確かに、北条雷太に会った。僕の目には三十歳ぐらいにしか見えなかったけれど、彼は間違いなく、一六五年前に生まれたのです。

そこへ、鳥居教頭・佐々木・恭子・大地・董・柳生先輩がやってくる。

十人

彼は一年に一度、やってくる。約束を守るためにやってくる。彗星のようにやってくる。やってくる。

十人が空を見上げる。空から、雪が舞い落ちる。